

2018年5月2日

みずほディーラーズアイ (2018年5月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

＊見通しは各ディーラーのビューに基づきます。

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 106.00 ~ 111.00

国際為替部 為替営業第二チーム 田内 清貴

■ 先月の為替相場

4月のドル/円相場は堅調に推移。
 月初2日、106円台前半でオープンしたドル/円は、米中貿易摩擦に対する懸念やIT株を中心に米株価が大きく下げたことによるリスク回避の動きに一時安値となる105.66円をつけたものの、その後の米株式市場の反発に下げ止まり106円台後半へ反発。中国財政省が農作物を含む米製品106品目に25%の追加関税を課すと発表したことを受け、米中貿易摩擦激化への警戒感が強まり105円台後半に反落する局面があったものの、中国が実施時期は「改めて公表する」と即時発動を見送ったことや、北米自由貿易協定(NAFTA)交渉が最終段階にあるとの報道などを材料に106円台後半まで再度買い戻される展開。さらにはクドロー米国家経済会議(NEC)委員長らトランプ米政権幹部が中国と交渉による合意を目指す姿勢を示すと、リスク回避の動きが後退し107円台半ばへ続伸。
 月央は107円台前半を中心としたレンジ取引に終始。トランプ米大統領の顧問弁護士オフィスにFBIが強制捜査を行ったとの報道やシリア情勢を巡る緊張の高まりに下げに転じ106円台後半をつける局面も見られた。しかし、習近平中国国家主席が国内市場の開放や関税引き下げの意向を表明したことから米中貿易摩擦懸念が後退し、米英仏によるシリア政府軍への攻撃も今回1度限りとの見方が拡がりシリア情勢緊迫化懸念も後退。19日の日米首脳会談も波乱なく終了したことで警戒感が和らぎ、結局107円台に値を戻した。

月末にかけては、北朝鮮が大陸間弾道ミサイルと核実験の開発中止を表明したことを受けて地政学リスクが後退し、また米10年物国債金利が2014年1月以来となる3%近辺まで上昇したことを背景に108円台後半まで上昇。その後も発表された米3月新築住宅販売件数、4月消費者信頼感指数が予想を上回り、さらに米10年物国債金利が3%を突破する展開に109円台前半まで続伸した。この水準では利益確定の売りに押され、また企業の資金調達コストが上がることで嫌気され米株価が下落したことから円買いの動きに108円台半ばまで反落。しかし、その後は米株価が下げ幅を縮小したことで円売りが優勢となったほか、低調なユーロ圏経済指標の結果を受け対ユーロを中心にドル買いの流れとなったことを受けて109円台半ばまで上伸した。27日には高値となる109.54円をつけ、結局109円台前半での高値圏にて越月。

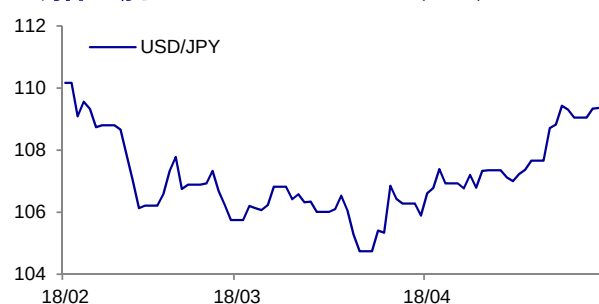
■ 今月の見通し

今月のドル/円相場は、米中貿易戦争に対する警戒感の後退や朝鮮半島・シリア情勢を巡る地政学リスクの後退を一旦は好感し109円台まで上昇したものの、月初からのイベント山積みで波乱リスクが注視される中、日米通商協議での日米貿易不均衡是正圧力への警戒感等を材料に伸び悩み展開を予想する。

月初のイベントとして米FOMCが1~2日に開催される。前回はFF金利の誘導目標が0.25%引き上げられ、FOMC参加者の経済見通しも従来比かなり楽観的なものとなり、この変更に合わせて政策金利見通しも上方修正された。また前月に公表された議事要旨では、1~3月期の景気の弱さはハリケーンの復興活動による押し上げが一巡したことや税還付が遅れたことによる一過性のものとされる中、追加利上げは今回ではなく次回と見る向きが多い。逆にいえば過度に利上げに対して慎重なハト派姿勢が示されるようなことがあれば、金利の急低下を招く恐れもあり、相場の波乱要因の可能性としていずれにしても注意が必要であろう。これから始まる2019年度予算編成に向けトランプ米政権や議会が財政規律を蔑ろにするようであれば、また貿易戦争や通貨戦争が本格的に激しさを増すようであれば、米国債の最大保有国である中国等が債券を売却し米国債価格や米ドルの下落圧力が強まる可能性も否定できない。トランプ米政権は11月の中間選挙に向けて貿易赤字削減を目指しており、中国製品に対しては1500億ドル規模の輸入関税を課す方針を明らかにしている。また、トランプ大統領は通商問題を巡り、近くムニューシン米財務長官とライトハイザー米通商代表部(USTR)代表を中国に派遣する方針を表明している。そのライトハイザーUSTR代表とは茂木経済財政相が6月に入って日米通商協議を行う予定となっており、米為替報告書で日本と中国は監視対象国リストに置かれたまま、米国は中国に対しては中国人民元への懸念を示し、日本に対しては実質実効レートと名目実効レートでも円安と批判していることに鑑みれば、予断を許さない状況が暫く続くと思われる。また、米政権が発動した鉄鋼とアルミニウムの輸入制限では、EUは5月初までは適用除外とされているが、その後は対象に入る可能性が残っている。これまでのトランプ米政権による交渉実績を見るに、交渉前や交渉中では脅しの牽制がリスク回避の材料となるケースが多く見て取れるが、交渉後には前面衝突の回避や先送り等でリスク選好の材料となるパターンが目立つだけに、貿易問題が熾り続けている間はドル/円を積極的に買い進めるまでには至らないと見る。

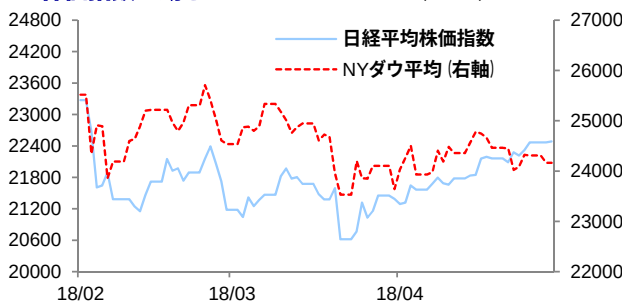
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/2	米ISM製造業景況指数	3月	59.6	59.3	60.8
4/4	米ISM非製造業景況指数	3月	59.0	58.8	59.5
4/6	非農業部門雇用者数変化	3月	185K	103K	313K
4/6	米失業率	3月	4.0%	4.1%	4.1%
4/6	米平均時給(前年比)	3月	2.7%	2.7%	2.6%
4/11	米消費者物価指数(前年比)	3月	2.4%	2.4%	2.2%
4/16	米小売売上高(前月比)	3月	0.4%	0.6%	-0.1%
4/17	米住宅着工件数	3月	1267K	1319K	1295K
4/27	米GDP(年率/前期比)	1Q	2.0%	2.3%	2.9%

カスタマーディーラーの相場観、注目点 (本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル・ブル (6名、107.00～113.00、中心107.25～112.25)

加藤	107.00 ～ 112.00	5月からは本邦の政局や米朝首脳会談等、政治問題が為替相場に色濃く影響を与えそうである。今のところ安倍下ろしの嵐は吹いていないがポスト安倍の動きには円高リスクとして要注意である。
佐藤	107.00 ～ 113.00	良好な米経済指標、インフレ率の高まりによる利上げペースの加速期待、地政学リスクの後退等、リスク志向が高まりやすい地合いにある。日米通商交渉に対する警戒は熾るものの、閣僚級の交渉開始は6月以降であり、5月はドル高円安地合いが継続すると予想する。
藤巻	107.50 ～ 112.50	景気は良好、利上げも順調に進めている、そしてインフレも弱くはないので今後上がってくる可能性もある。また、株についても落ち着いており、金利も上昇基調。以上を鑑みると、基本的にはドル円は下がるというよりは上方向なのではないかと考えている。
岡本	107.00 ～ 113.00	鉄鋼・アルミニウム輸入関税や貿易戦争関連などが重石となる可能性は引続き拭えないものの、経済指標でその影響は未だ確認できておらず、地政学リスクが全般的に落ち着きを取り戻す中、ドル円には買いが入りやすい地合いが続くだろう。
鶴田	108.00 ～ 111.50	足許で意識されていた米中貿易問題やシリア情勢を巡る米ロ関係などの懸念材料が後退する中、北朝鮮情勢を巡っても南北首脳会談が実現するなど、リスクオフ材料があまり見つからない状況。ドル円相場がレンジを大きく切り上げる展開はあまり想像出来ないが底堅い展開が続くと予想する。
大熊	107.50 ～ 112.00	南北首脳会談を経て、米朝首脳会談を6月に控える中、北朝鮮の地政学リスクは後退している。また、米国の雇用やインフレ関連指標は良好で景気の底堅さは確認されている為、FRBによる利上げペース加速の期待が高まりやすく、ドルが買われやすい地合いは続くと思われる。

■ドル・ベア (5名、105.00～111.00、中心105.00～111.00)

田内	106.00 ～ 111.00	米中貿易戦争に対する警戒感後退や朝鮮半島・シリア情勢を巡る地政学リスクの後退に109 円台まで上昇したものの、日米通商協議での日米貿易不均衡是正圧力への警戒感や安倍政権の政権運営に黄信号が点滅し始めたこと等を材料に伸び悩む展開を予想する。
山下	105.00 ～ 110.00	トランプ米大統領としては中間選挙までの間に国内の支持を高めたいところであり、貿易問題については一歩も譲らないであろう。過熱する米金利の上昇による株式相場への影響も懸念されるところであり、貿易戦争懸念や株式相場崩落リスクからドルを買い進めるのは危険と考える。
矢野	105.00 ～ 110.00	足もとでは米金利上昇を材料にドル円相場が堅調推移を見せているが、これまでも米利上げ観測は根強く、その中で金利差は材料視されていなかったことから足もとの状況は違和感を感じる。あくまで一過性の上昇と見ており、引き続き利食い等から上値は押さえられると予想。
上野	106.00 ～ 111.00	資源高に伴うインフレ率押上げ、急速に悪化する米財政状況という米金利上昇の素地は引続き健在だが、金利上昇局面では企業の資金調達コストの増大やそれに伴う米景気の減速リスクへの懸念が高まる。積極的にドルが買い進められる展開は想定しにくく、ドル円は次第に調整局面を迎えたと予想する。
森谷	105.00 ～ 111.00	先月のドル円相場は上昇する展開となったが、リスクオフの巻き戻しによるところも大きかったと考えている。急落リスクこそ後退している状況ではあるものの、金利上昇局面においては株式市場に対するネガティブな影響が意識されやすく次第に上値の重さが意識されやすくなる展開を予想する。

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.1800 ~ 1.2200
EUR/JPY 129.00 ~ 134.00

国際為替部 為替営業第二チーム 山下 智子

■ 先月の為替相場

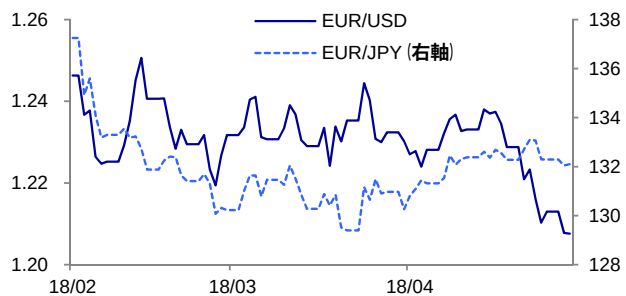
月初2日に1.23台前半でオープンしたユーロ/ドルは、欧州市場休場の中で1.23半ば近辺まで上昇したが3日の独3月製造業PMIが下方修正されると1.22台半ばまで反落。4日、中国が追加関税を発表し米中貿易摩擦懸念からドル売りが先行する展開に1.23前半まで上昇したが、5日にはクドロー国家経済会議委員長の「トランプ政権は中国と交渉での解決を模索」との発言を受け1.22台前半まで下落した。6日は米3月雇用統計の弱い結果などを受けてドル売り優勢地合いとなり1.22台後半まで上昇した。9日は1.2261まで弱含んだが、ECB 年次報告でドラギECB 総裁が2018年のユーロ圏経済は拡大し続けると発言したことで1.23台前半まで急上昇した。10日はECB のノボトニー・オーストリア中銀総裁が政策金利を20bp引き上げる可能性を指摘したことから1.23台後半まで続伸も、ECB 報道官がノボトニー氏の発言はECBの見解ではないと発言すると1.23台前半まで急落した。11日は1.2396 まで上昇するものの、FOMC議事要旨発表後のドル買いに押され1.23台半ばまで下落した。12日には予想を大幅に下回ったユーロ圏2月鉱工業生産やECB 政策理事会議事要旨のハト寄りの内容に1.23近辺まで続落した。16 日には1.2325 まで下落したが、欧州金利上昇やトランプ大統領の通貨安誘導批判を背景としたドル売りの流れに1.23 台後半まで上昇した。17 日には一時1.2414 をつけたが、独4月ZEW 期待指数が2012年11月以来の低水準になったことなどを受けて1.23 台前半まで急落した。18日はユーロ圏3月消費者物価指数(確報)で速報値・2月分が下方修正され、一時1.23台前半まで値を下げる場面も見られたが、引けにかけて1.23台後半を回復した。19 日は米金利上昇によるドル買いに1.23 台前半まで下落した。20日にはECBのQE終了時期の示唆は7月まで待つ方向の傾いているとの関係者談が報じられ利上げ期待が後退し1.22台半ばまで下落した。翌週23日は発表された独連銀月報で1〜3月の成長は著しく減速との内容に1.22割れへ下落し、24日の独IFOも市場予想を下回る結果に上値重い展開となったが、ダウの急落を受けてドル売り地合いとなったため1.22台半ばまで戻した。26日のECB政策理事会では予想通りの政策変更なしでドラギECB総裁の会見もタカ派的な内容とまでは行かず、ユーロロングの投げから1.21後半へ下落。その後も海外勢を中心にユーロ売り優勢で、27日には1.20台後半まで続落した。翌週30日には一時1.2130台まで買い戻される場面もあったが、英GDPの悪化に伴うポンド安に連れられ1.20台へ再び下落した。

■ 今月の見通し

今月のユーロも引き続き上値重い展開を予想する。
先月のECB政策理事会では市場予想通り金利やステートメントに変更はなかったものの、ドラギECB総裁の会見では堅調で幅広い成長が続く・賃金上昇に心強いサインとの発言の一方で、金融政策そのものについては議論しなかったとも発言した。先月、ECB関係者筋からのQE終了時期の示唆は7月まで待つ方向に傾いているとの発言もあり、今後のユーロ圏景気・物価動向を見極めたいところであろう。ユーロ圏各国ひいてはECBとしては機動戦士のシャアの言葉を借りれば「認めたくないものだな」というところであろうが、ユーロ圏全体の景気・物価を底上げしてきたドイツの動向にかかっており、長く続いたECBのマイナス金利からの脱却には昨年のようなドイツ経済の快進撃が必須である。しかし今年に入ってから経済指標においてはドイツの景気減速が目立つ。世界最大の労働組合である独IGメタルが賃金と労働時間を巡ってストライキを敢行した影響も多分にあるものの、先月発表された独2月小売売上高(前月比)・独鉱工業生産(前月比)は市場予想を大きく下回った。独3月CPIも前月と同水準の伸びにとどまり、原油価格の上昇をユーロ高が打ち消した状況である。景況感も見てみても、独商工会議所は設備投資の加速により2017年10月に引き上げた2018年独成長経済率見通しを2月には更に引き上げているが、直近の独4月はZEW・IFO共に市場予想を下回る結果となっており、これら上記のユーロ圏経済指標はドイツの煽りを受け、総じて軟調な数値となった。ユーロ危機を脱して拡大してきたユーロ圏経済において、今回の景気鈍化は一時的なものとの見方もあるが、7月までにそれ自体を見極めるには時間が足りない。トランプ米大統領による勃発した貿易戦争も日本や中国・NAFTA諸国と共にドイツを含めたユーロ圏もターゲットとなっており、ドラギECB総裁もこの点は未知数としながらもリスクとして挙げている。もちろん関税等による報復措置に至るまでには時間を要するであろうが、国内の求心力低下に喘ぐトランプ米大統領が今年の11月に行われる予定である米中間選挙に向けて圧力を高めてくれれば、企業や消費者心理の冷え込みも懸念される。覚束無いドイツのメルケル政権や5つ星運動の台頭によるイタリア政権に加え英国のEU離脱交渉への不透明感も増しており、これら上記の要因を総合的に考え、今月のユーロは弱含む展開になると予想する。

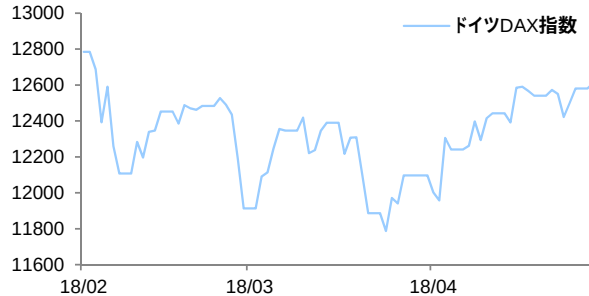
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/3	独小売売上高(前月比)	2月	0.7%	-0.7%	-0.7%
4/4	ユーロ圏失業率	2月	8.5%	8.5%	8.6%
4/17	独ZEW現状/期待指数	4月	88.0/-1.0	87.9/-8.2	90.7/5.1
4/18	ユーロ圏CPI(前月比)	3月	1.0%	1.0%	0.2%
4/20	ユーロ圏消費者信頼感	4月	-0.1	0.4	0.1
4/24	独IFO企業景況感	4月	102.8	102.1	103.2
4/26	ECB主要政策金利	-	0.00%	0.00%	0.00%
4/30	独CPI(前月比)	4月	-0.1%	0.0%	0.4%

カスタマーディーラーの相場観、注目点 (本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ・ブル (1名、1.1900～1.2400、中心1.1900～1.2400)

鶴田	1.1900 ～ 1.2400	一定のレンジ内での堅調推移が続いたユーロ相場も足許ではやや弱含んでいる状況。経済指標の伸び悩みはあるもののECBが着実に正常化路線を歩む中、このまま一方的に下押しされる展開は考えづらく、自立的に値を戻す展開に期待したい。
----	-----------------------	--

■ ユーロ・ベア (10名、1.1700～1.2200、中心1.1750～1.2200)

田内	1.1800 ～ 1.2200	ユーロ圏のインフレ鈍化を受けてフォワードガイダンスの変更は7月のECB理事会まで先送りされる可能性が高い。ロシア二重スパイ襲撃事件やシリア情勢を巡る欧州とロシアの関係悪化に対する警戒感、イタリアの政局混迷等がユーロの上値を抑える要因となり、上値の重い展開を予想する。
加藤	1.1700 ～ 1.2200	ユーロ高がユーロ圏のファンダメンタルズに与えた影響が看過できないものであったことが顕在化している。投機筋のユーロロングも過去最高レベルを示現してきており、その調整が入り始めている。
山下	1.1700 ～ 1.2100	ユーロ圏を支えてきたドイツ経済の鈍化が目立ち、圏内各国もユーロ高に苦しんでいる状況下、ECBとしては強気な姿勢一辺倒というわけには行かなくなるであろう。EU懐疑派のイタリア5つ星運動台頭による政治リスクも鑑み、ユーロの上値は重いと予想する。
矢野	1.1800 ～ 1.2200	ユーロ圏のファンダメンタルズも堅調とはいえず、そのような中でこれまで積み上がってきた投機筋のロングポジションの解消も入り始めていることから上値の重い地合いとなっている。直近のECB議事要旨からもハト派色が見られることから軟調地合いが継続すると予想。
佐藤	1.1700 ～ 1.2200	良好な米経済指標、インフレ率の高まりによる利上げペース加速期待等を背景にドルの買い戻しが入りやすい。ECBによる金融政策変更期待は残存するものの、当面は新たな情報が出てくるとは思えず、ユーロは軟調地合いが継続しそうだ。
藤巻	1.1900 ～ 1.2200	ユーロ高の悪影響からか足許ユーロ圏の景気は黄色信号が灯りつつある。一方で、投機筋は大幅なユーロロングとなっており、一段のポジション調整が入る可能性がある。但し、原油が高止まりする中、高官はタカ派なスタンスを継続しており、1.2割れなど売られたところでは買いが入ってくる可能性も。
岡本	1.1800 ～ 1.2200	ユーロ圏の経済指標は弱いものが目立ち始めており、テーパリングの議論も先送りになっている状況を勘案すると、昨年夏以降続いたECBの金融政策正常化期待を元にしたユーロ買いは終焉を迎えた印象。当面はポジション調整の売りに押されるだろう。
上野	1.1800 ～ 1.2200	直近のECBではユーロ圏景気が堅調との認識が示されたが、ユーロ圏の経済指標の弱さに言及されるなど、景気減速リスクも煽る。直近、投機筋のユーロの買い持ちが過去最大水準を記録しており調整は道半ば。ユーロは暫くは調整に伴う下落を余儀なくされるのではと考えている。
森谷	1.1700 ～ 1.2200	ECBに対する緩和縮小期待を背景としたユーロ高は一服している状況。足許ではユーロ圏の経済指標が弱含んでいることや、依然としてユーロロングポジションが積みあがっている状況であることを勘案すると、今月のユーロ相場は伸び悩む展開を予想する。
大熊	1.1700 ～ 1.2200	欧州の足元の経済指標は弱めな内容が多く、ドラギECB総裁はユーロ圏の景気回復がピークを過ぎた可能性に言及している。拡大資産購入プログラムを9月に打ち切ることについては慎重な見方が大勢で、ユーロ高への警戒感もあることから、軟調な推移を予想する。

英ポンド相場

予想レンジ:

GBP/USD 1.3450 ~ 1.4000
GBP/JPY 145.00 ~ 154.00

欧州資金部 山本 泰平

■ 先月の為替相場

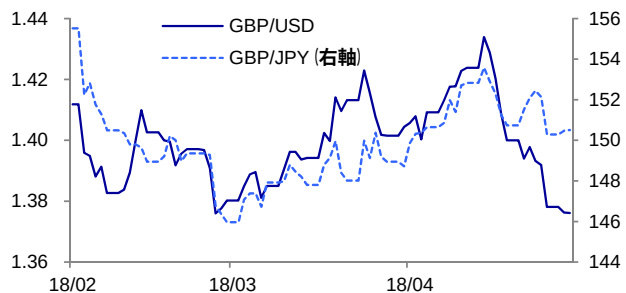
4月のポンドドルは、序盤堅調推移するも、大寒波(ビースト・フロム・ザ・イースト)の影響から、英経済指標が軒並み低調で、結局陰線をつけた。1.4024でオープンし、英3月建設業購買担当者景気指数が47.0(予想:50.8)と、2月の51.4から低下し、英3月サービス部門購買担当者景気指数も51.7(予想:54.0、前月:54.5)に悪化。英国民投票直後の2016年7月以来の低水準となったことで、1.3960に下落。その後、中国当局が、米産自動車、医薬品に対する関税25%の上乗せを示唆し、米中報復合戦懸念が高まるとドルが売られ、マカファーティ英中銀委員の「追加利上げを遅らせるべきでない」との見解に、英利上げ期待が強まると、ポンドが対ドルで反転。英EU離脱を決めた国民投票以来の高値1.4377に上昇。17日は、英失業率が発表され、40年超ぶりの低水準4.2%に改善したものの、翌日の英消費者物価指数発表を控え、実質賃金の観点から注目を集めた英12—2月の賃金の伸びが前年比2.8%増となり、予想の3.0%増を下回ったことから、反落。注目された英3月インフレ率(CPIH)は、2009年9月以降で始めてロンドンの住宅価格が低下(前年比マイナス1.0%)し、前年比+2.3%(予想:+2.5%)に鈍化。住宅コストを除くCPIも前年比+2.5%(予想:+2.7%)となり、実質賃金は1年ぶりに上昇に転じたが、利上げ期待が剥落し利益確定売りが強まったため、1.42割れを示現。19日、英中銀総裁が来月の利上げは既定路線でないと示唆すると、殆ど完全に織り込まれていたOIS市場の5月利上げ確率が約3割まで低下し、1.3985に下落した。越週後は、メイ内閣が、関税同盟に留まる場合、強硬派のジョンソン外相やフォックス国際貿易相が辞職する可能性が伝わると、逆説的にソフト・ブレグジット内閣となるのでは、との期待で下げ渋るも、米10年債利回りが3%挟みで上昇基調にあることがドル買いを誘う中で反転には至らず、安値を更新。27日は、英第1四半期GDP速報値が前期比0.1%増と12年以来的低い伸びが示され、来月の英利上げの実現性に疑問が生じたことから、1.3748に下落。最終週も、次期首相候補でもあった英内相が戦後の移民めぐり不祥事で辞任し、5月の地方選挙前にメイ政権の支持低下が懸念される中、ポンド売りが継続。月中安値1.3715をつけ、クロウズした。

■ 今月の見通し

ポンドドルの季節性要因に注目すると、5月は過去10年中、金融危機の2009年を除く、全ての年で低下(頻度90%)している。5月相場の格言(セル・イン・メイ)通り、リスク感応度が比較的高いポンドは売られやすいだろう。先月から再スタートした英EU離脱交渉は、EU交渉官によると合意に至っていない問題が25%残っている。北アイルランドの国境管理等が含まれ、それらが残っている限り、予定通りの離脱は不可能と警告された。一方、英EU離脱担当相からは、大まかな方針のみを合意し、詳細は先延ばしにするベア・ボーン・ディールで着地すると議会で発言。双方の隔たりは大きい。5月上旬には、英政府が約50ページの要望書を公表する見込みだが、歩み寄りがなければ、10月(交渉期限)までの妥結の確度が遠のき、ポンド売りを誘うだろう。関税同盟については、EUは北アイルランドのみを関税同盟に残す「バックストップ措置」を提案するも、EU関係者は、英国全体に適用すべきと早々に拒否。離脱交渉は難航しそうだ。また、閣外協力する民主統一党(DUP)も、英国案に難色を示し、同意が取り付けられない場合、閣外協力を打ち切る(メイ政権が過半数を割る)と強調。英上院がメイ首相のEU離脱主要方針である関税同盟離脱に対する反対法案を348対225で可決したことも交渉を難しくした。国内外で問題山積、かつ自縄自縛の様相だ。世論調査(YouGov)で44%の回答者が2回目の国民投票を望み、望まないと応えた41%を上回ったことを鑑みると、一足飛びに国民投票のやり直しとまでは行かないまでも、解散総選挙の可能性は相応にあるかも知れない。5月3日には、総選挙後で最も大規模な選挙となる地方選が実施され、4000を超える議席が争われるが、支持率は労働党51%に対し、保守党は29%と与党の苦戦が予想(YouGov)される。ブックメーカーでは3分の2の確率で2018年9月末までにメイ首相が退陣することが織り込まれている。英議会がEUとの緊密な関係を維持する以上、最終的には英政府はEUの要求を受け入れてでも、ソフト・ブレグジットで妥結する可能性が高そうだが、しばらくは不透明感が直接投資を減退させ、ポンド売りを誘うだろう。英金融政策を巡っては、5月10日に発表される英中銀インフレ報告と政策金利の行方が注目される。前会合で利上げを支持した、ソーンドース委員とマカファーティ委員は依然として肯定的発言が目立つが、カーニー総裁が水を指したことで、市場は半々との見方。四半期に一度公表されるインフレ報告は、足許のインフレ率が今年の見通し(2.9%)を下回っていることから、引き下げられる公算。

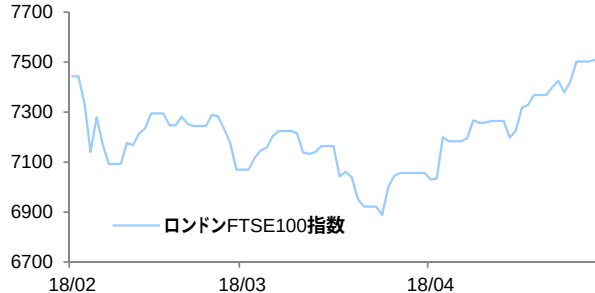
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/3	製造業PMI	3月	54.7	55.1	55.0
4/4	建設業PMI	3月	51.0	47.0	51.4
4/5	サービス業PMI	3月	54.0	51.7	54.5
4/11	鉱工業生産(前年比)	2月	2.9%	2.2%	1.2%
4/11	製造業生産(前年比)	2月	3.3%	2.5%	2.2%
4/17	ILO失業率	12-2月	4.4%	4.2%	4.3%
4/18	消費者物価指数(前年比)	3月	2.7%	2.5%	2.7%
4/19	小売売上高(含自動車/前年比)	3月	1.9%	1.1%	1.5%
4/27	GDP速報値(前年比)	1Q	1.4%	1.2%	1.4%

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.7400 ~ 0.7650
AUD/JPY 81.00 ~ 84.00

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 山口 美紀

■ 先月の為替相場

4月の豪ドルは年初来安値0.7525を付けた。

2日、豪ドルは0.76後半でスタート。3日、豪準備銀行(RBA)理事会では、予想通り政策金利が1.50%に据え置かれ、豪ドルへの影響は限定的。翌日、豪2月小売売上高が前月比+0.6%増加と市場予想+0.3%を上回り、豪ドルは0.77台に浮上。

10日、中国の習近平国家主席が国内市場の開放や関税を引き下げる意向を表明したことから米中貿易摩擦懸念が後退。リスク選好の動きが強くなり、リスク通貨とされる豪ドルも0.77半ばに上昇。その後、豪ドルは底堅く推移し、一時0.78台に浮上するも、米英仏3か国のシリアに向けてのミサイル発射から、豪ドルは0.77台に反落して推移した。18日、米国のロシア企業に対する制裁措置で世界の金属相場が急騰。ロンドン金属取引所(LME)でアルミニウム先物価格は7年ぶり高値、ニッケルは9年ぶり高値まで上昇。原油相場もシリア情勢緊迫から4年ぶり水準まで上昇した。翌日、商品価格の上昇を受けて、商品通貨とされる豪ドルも4月高値となる0.7813まで上昇した。しかし、同日、海外市場において、米長期債利回りが2.9%に上昇し、ドル買い進行。豪ドルは0.77前半に急落した。

20日、米長期債利回り上昇が継続。ドル買いから豪ドルは一段と値を下げ、0.76半ばに下落した。翌週に入り、とうとう米10年債利回りが節目3%目前の2.99%と4年ぶり高水準を付け、豪ドルは0.76前半に下落。24日、豪1〜3月期消費者物価指数(CPI)が前期比+0.4%、前年比+1.9%と、市場予想(前期比:+0.5%、前年比:+2.0%)を下回った。RBAのインフレターゲット(2〜3%)にも届かなかったことから、RBAの早期利上げ観測後退から、豪ドルは0.75後半に下落。翌日も、米債利回り上昇からドル買い/豪ドル売りが継続し、豪ドルは0.75半ばに下落。27日、米債利回り上昇は一服するも、ドル買いは継続となり、豪ドルは年初来安値0.7525を付けた。

■ 今月の見通し

5月の豪ドルは軟調な展開を予想する。

4月の豪ドルは米10年債3%突破によるドル買いにより、年初来安値を更新した。シリア情勢不安等の地政学リスクが高まり、原油高が加速し、期待インフレ率上昇。更に、トランプ政権による国債発行増発懸念も加わり、米10年債利回りは4年ぶり高水準まで上昇している。また、豪ドルは、テクニカル的にサポートされていたライン(2016年、2017年の安値を結んだライン)が0.76近辺に位置しているが、豪ドルは明確にこのラインを割れ、一段の下押し圧力がかかりやすい状況と考える。更に、豪1〜3月CPIはRBAインフレターゲット(2〜3%)を下回り、しばらくはRBAの金融政策維持が予想され、豪ドルは上値重く推移するだろう。

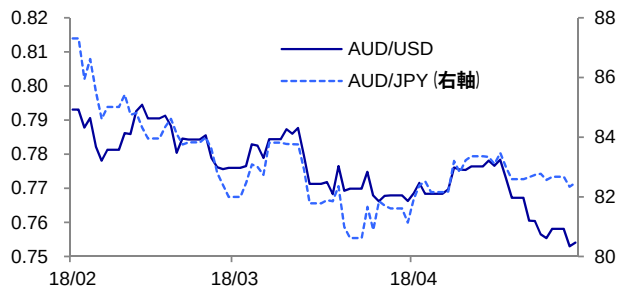
また、米国では1〜2日にFOMCが開催される。前回3月FOMCにおいて25bpの利上げが行われたことから、今回はその影響を見極めるため、追加の金融引き締めは見送る見通しだ。更に、FOMCメンバーの経済・政策金利見通しでは、2018年3回利上げで据え置かれたため、早くも次の追加利上げは6月の可能性が高く、今月のFOMCでは為替市場を大きく動かす材料は出にくいと考える。

一方、3月より過熱している米中貿易摩擦懸念や米国の保護主義動向には注意を払いたい。中国が譲歩の姿勢をやや見せているが、米中の貿易戦争が現実のものとなれば、アジアを中心に世界経済や豪州経済に下押し圧力が加わることは避けられない。また、南北首脳会開催など北朝鮮情勢への警戒は和らいでいる。次の焦点は6月半ばまでの開催が予定されている米朝首脳会談となる。政治動向、ニュースには引き続き留意したい。

5月の注目指標は以下と見る。1日:RBA理事会、3日:豪3月貿易収支、豪3月住宅建設許可件数、4日:RBA四半期金融政策報告書、8日:豪3月小売売上高、11日:豪3月住宅ローン承認件数、15日:RBA議事録、16日:豪1〜3月賃金上昇率、17日:豪4月雇用統計、30日:豪4月住宅建設許可件数。

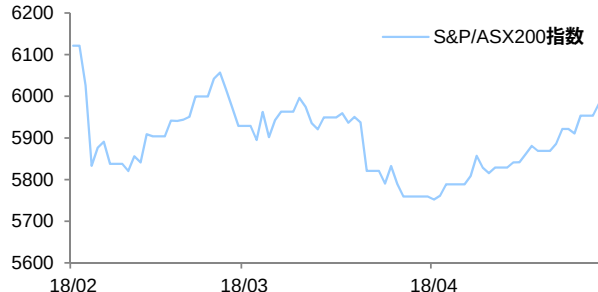
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/3	RBAキャッシュレート		1.5%	1.5%	1.5%
4/4	住宅許可件数(前月比)	2月	-5.0%	-6.2%	17.2%
4/4	小売売上高(前月比)	2月	0.3%	0.6%	0.2%
4/5	貿易収支	2月	A\$ 725M	A\$ 825M	A\$ 952M
4/12	住宅ローン承認件数(前月比)	2月	-0.4%	-0.2%	-1.0%
4/19	雇用者数変化	3月	20.0千人	4.9千人	-6.3千人
4/19	失業率	3月	5.5%	5.5%	5.5%
4/24	CPI(前年比)	1-3月	2.0%	1.9%	1.9%
4/24	CPI トリム平均(前年比)	1-3月	1.8%	1.9%	1.8%
4/24	CPI 加重平均(前年比)	1-3月	1.9%	2.0%	2.0%

カナダドル相場

予想レンジ: USD/CAD 1.2400 ~ 1.3100
CAD/JPY 83.00 ~ 88.00

グローバルマーケット業務部 カナダ室 三木 順一郎

■ 先月の為替相場

USD/CADは1.2898で4月入り。月前半は先月からの下落トレンド継続、後半はカナダ中央銀行政策金利決定会合を契機として上昇に転ずる展開、月間高値は1.2944(4/2)、月間安値は1.2528(4/17)。

3日にNAFTA再交渉で最大の争点となっている乗用車関税に関して米国が譲歩、早期合意が発表される見通しとの報道が流れるとCAD高を背景にUSD/CADは1.28を下回る水準にまで下落。6日に発表された3月カナダ雇用統計では+3.2万人の雇用者増が確認され堅調な内容であったが、平均時給の伸び率が前年比+3.1%と市場予想を下回ったことから揉み合い。

しかし、9日に発表された2018年1～3月期のビジネスアウトルック調査で良好な結果が発表されるとCAD高からUSD/CADは下落。さらに翌10日には、サウジアラビアがサウジアラムコIPOも控え原油価格80ドルを目指していることが伝わったことや、緊迫化するシリア情勢を背景に原油価格が3年4か月ぶりに67ドル台の高値を付けると、USD/CADは1.25台へ下落した。

以降、1.25台での揉み合いが続いたが、18日のカナダ中央銀行政策金利決定会合で政策金利は現行の1.25%で据え置き、ややハト派なカナダ中央銀行のスタンスが確認されると、CAD安からUSD/CADは上昇トレンドに。

20日に発表されたカナダ3月消費者物価指数は前年比+2.3%と市場予想2.4%を小幅ながら下回り、カナダ2月小売売上高も市場予想を下回ったこともUSD/CAD上昇を後押し。

24日には米10年債利回りが3%を付けるなど米金利上昇が顕著な中、米ドル高からもUSD/CADの上昇トレンドが継続、ECB後のユーロ安もあり1.28台半ばにて取引されている。

■ 今月の見通し

先月から続くNAFTA再交渉合意に向けた前向きな報道、米・カナダ両国からの前向きな発言から来月くらいでの合意発表は市場では織り込み済みと推測。

カナダ金融政策に関しては4月の政策金利決定会合では3月からのスタンスは大きく変えず、「remain cautious with respect to future policy adjustments, guided by incoming data」と利上げはするが慎重に、中期的に、ということが確認された。経済指標次第ということだろうが、今年に入ってからのは総じて悪くはないが、2017年のもの程ではなく、カナダ中銀も指摘するように輸出面では弱さも確認され、利上げを急ぐというスタンスではない。

米国の利上げ次第のところもあるだろうが、今年はやってあと2回だろう。

他通貨の強さも相まっての年初からの米ドルの弱さは気になるものの、欧州ファンダメンタルズにも陰りが見えユーロも折り返し気味であることから、基本的には1.24～1.31のレンジ相場の見方不变。

原油については足許の上昇を受けた米国増産は確かであり、協調減産継続が既に織り込まれる中基本的には大きな上昇は想定しないが、しばらくは楽観スタンスが支配か。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

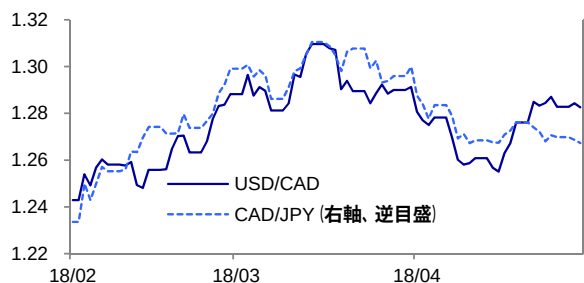
『当地のびっくり事情』

今のところ正直あまりびっくり事情もないのですが、敢えて言うなら先週の雪でしょうか。4月中旬にもなり日本は夏かと錯覚させられるような暖かさらしいのに、こちらは一面冬景色、やっぱり気分も沈みます。

しかし、先週末(4/22)は初めて春の陽気が到来、外に出てみようという気になりました。本当の春が来ることを切に望みます。

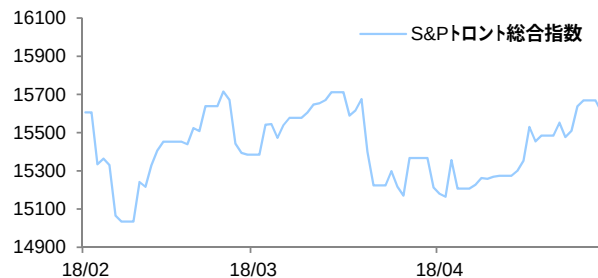
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/5	貿易収支	2月	-2.10b	-2.69b	-1.94b
4/6	雇用統計	3月	+20.0k	+32.3k	+15.4k
4/6	失業率	3月	5.8%	5.8%	5.8%
4/6	平均時給変化 (YoY)	3月	3.4%	3.1%	3.1%
4/9	BOCビジネスアウトルック調査	Q1	—	16	8
4/18	カナダ中銀政策金利	—	1.25%	1.25%	1.25%
4/20	小売売上高 (前月比)	2月	0.4%	0.4%	0.1%
4/20	消費者物価指数(前月比)	3月	0.4%	0.3%	0.6%
4/20	消費者物価指数コア(前年比)	3月	2.2%	2.1%	2.1%

(資料) ブルームバーク

韓国ウォン相場

予想レンジ:

USD/KRW 1040 ~ 1090
 KRW/JPY 9.90 ~ 10.64
 JPY/KRW 9.40 ~ 10.10

(注) 100韓国ウォンあたりの対円レート

ソウル資金室 下山 泰典

■ 先月の為替相場

先月のドル/ウォン相場は、終盤までは概ね上昇していたが、27日の南北首脳会談後には下げ足を強めた。終盤まで上昇した背景としては、米長期債利回りの上昇や外国人投資家による韓国企業の配当金を海外に送金するニーズなどが強まったことが大きいだろう。

月初、1061.00でオープン。3月下旬に米韓で通貨安誘導禁止の覚書が締結されたことに絡んでウォン買いが進行、3日には1054.00まで下落した。これは、利上げフェーズかつ経常黒字である韓国の通貨ウォンは基本的には買われやすいはずとの市場の基本認識がある中で、韓国が通貨安誘導をしにくくなるのではとの思惑からウォン買いの動きに繋がったといえよう。

しかし、その後は米中の貿易戦争の懸念やシリア空爆の懸念などが高まるとウォン売り優勢になり、実際にシリア空爆が実行された翌営業日である16日には1075台まで上昇した。それでも、南北首脳会談や米朝首脳会談を控える中で、北朝鮮から融和的なムードが演出されたことなどを受けて19日には一時1060を割り込むところまで下落する局面があった。なお、12日にはBOK金融通貨委員会が開催されたが、特段踏み込んだトーンなどは無かった印象。

しかし、その後、原油価格の上昇などをきっかけに、インフレ見通しが高まり米長期債利回りが上昇、ドル買いにも繋がり、ドル/ウォンは大きく上昇。

それでも、27日に開催された南北首脳会談で発表された板門店宣言では、現在休戦協定中である朝鮮戦争について同協定を平和協定に転換することや、朝鮮半島の完全な非核化を目標とすること、段階的な軍縮を実現することなど、比較的踏み込んだ内容となった印象。これを受けて、先月27日の海外NDF市場では大きくウォン買いとなり、30日のオンショア市場もウォン高でオープン、結局1068.00でクローズした。

■ 今月の見通し

今月のドル/ウォン相場は上値の重い展開を予想する。良好なムードで決着した南北首脳会談に続き、現実味を増している米朝首脳会談に注目が集まるだろうが、友好的なムードであれば基本的には一段のウォン買いとなるとみている。

先月27日に開催された南北首脳会談。2007年以来的の開催となったが、発表された板門店宣言では、現在休戦協定中である朝鮮戦争について同協定を平和協定に転換することや、朝鮮半島の完全な非核化を目標とすること、段階的な軍縮を実現することなど、比較的踏み込んだ内容となった印象。これを受けて、先月27日の海外NDF市場では大きくウォン買いとなった。

今後は、トランプ大統領が3-4週間のうちにも発言した米朝首脳会談に焦点が当たることになる。5月中に開催されるか自体まだ不透明ではあるが、会談に関する報道は次々と出てくると思われ、ある程度そのトーンに振られることになる。足元の状況としては、南北首脳会談は各国や国連が評価しており、米朝首脳会談への期待感も高まっている印象。米朝会談においてトランプ政権が足元で掲げている条件は決して低いものではなく、北朝鮮との合意に関しては不透明な部分もあるが、決裂はすなわち戦争を意味する可能性もあるため、最終的には何らかの落としどころを見るだろう。それはすなわち一段をウォン買いを誘うものと思われ、会談前から期待感によりややウォン買い圧力が高まりうるとみている。

但し、他のところで懸念は燃える。株式市場に対してネガティブインパクトがある材料が出てきた場合、ムードが一気にリスクオフに傾く可能性が否定できない。足元では、原油高や、それをきっかけとする米長期債利回りの上昇、依然燃ゆる米通商政策などが挙げられる。特に原油については米政府は5月12日までにイランに対する経済制裁を再発動するかどうかの決断を下す予定。再発動とした場合、原油価格が急騰する可能性があり、インフレ懸念から米債利回りは上昇、株もネガティブなインパクトを受け、ドル/ウォンは上昇するだろう。リスクオフムードのウォン売りや米長期債利回り上昇に伴うドル買いとで、比較的大きな値動きに繋がる可能性も否定はできない。

以上を勘案、基本線はウォン買い優勢でドル/ウォンの上値は重いとみているが、材料次第では大きく上昇する可能性もあるため注意して臨みたい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のびっくり事情』

ソウルに赴任して約半年ですが、驚いたことがたくさんありますので、いくつかご紹介したいと思います。

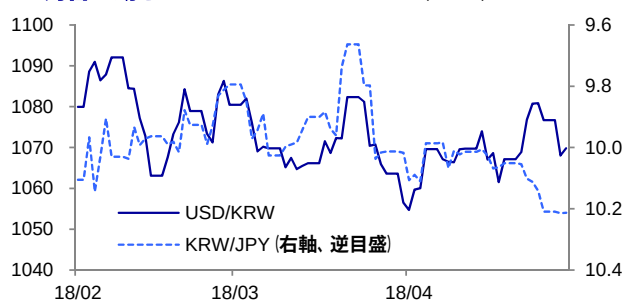
まず、冬が寒い！寒すぎる！昨年10月に赴任したのですが、11月の時点で私が東京で使っていた最強の防寒具で耐えられなくなり、急遽、陸上部のロングダウンをさらに強固にしたような、まるで布団を着ているかのような膝丈ダウンを購入。出費はなかなかのものでしたが、これは買ってよかった。ある朝、私のスマホに煌々と表示されたその日の気温はマイナス18度。風などを考慮した体感気温はマイナス26度。もはや笑うしかありません。何しろ、その日はモスクワよりも寒かったんです。体感的にも寒いを通り越して、もう「痛い」んです。想像してみてください、その気温に晒される顔や耳を。ダウンコートにはフード(帽子)が付いているものもありますが、こちらではフードは飾りではありません！身を守るための生活必需品なんです。

でも、そんな気候に対応するため、韓国にはすばらしい文化があります。「オンドル(床暖房)」です。日本って、留守にするときにはエアコンを切るの、家に帰ると寒いんですよね。でも、こちらのオンドルは冬の期間つけっぱなしなので、家に入るといつもとっても暖かいんです！部屋に入ったときの安心感たるや……。韓国で大好きな部分の1つです。

そんな韓国の好きなところをもう1つ。道でビラ・広告を配っている方がよくいます。日本にもいますが、韓国では高齢の方が多い印象です。私個人は日本でもそういった配布物はほとんどもらったことがありませんが、韓国の方、よく受け取るんです。理由をNSに聞いたところ、「だって、もらってあげないと、あのおばあさんたちの仕事終わらないじゃないですか」と。あ、そんな配慮が……。韓国の方の温かさが良いですね！そんな韓国、皆さまのお越しをお待ちしております！（下山）

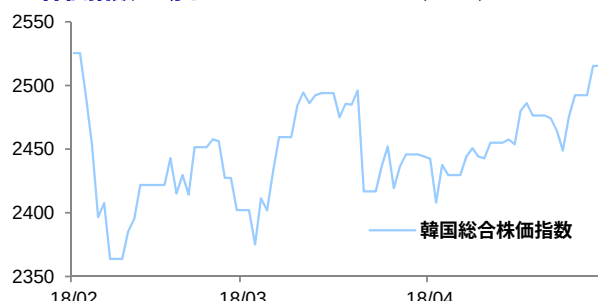
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/3	CPI(前年比)	3月	1.4%	1.3%	1.4%
4/5	経常収支	2月	-	\$4027.3M	\$2680.4M
4/11	失業率	3月	3.6%	4.0%	3.6%
4/12	BOK金融政策発表	-	1.50%	1.50%	1.50%
4/26	GDP(前年比・速報値)	1Q	2.9%	2.8%	2.8%
4/27	南北首脳会談	-	-	-	-
4/30	鉱工業生産(前年比)	3月	-1.6%	-4.3%	-6.8%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 29.20 ~ 30.00
TWD/JPY 3.57 ~ 3.80

台北資金室 三浦 勇二

■ 先月の為替相場

4月のドル/台湾ドル相場は、ドル高台湾ドル安。

月初4/2のドル/台湾ドルは29.100でオープン。台湾の株式市場からの海外資金の流出を受けてドル買い台湾ドル売り取引が優勢の展開となると、4/3にかけて29.189まで上昇。しかしながら、その後は輸出企業のドル売りフローに押されて上値重く推移し、4/4からの連休を前にドル/台湾ドルは29.148で取引を終えた。

連休明けの4/9は、連休中にクドロー米国家経済会議委員長らトランプ米政権幹部が中国との通商問題に対し、交渉による合意を目指す姿勢を示したことが好感され、ドルが上昇したことを背景にドル買い台湾ドル売りが先行し、取引序盤に29.279の高値をつけた。もともと、その後は輸出企業のドル売り台湾ドル買い取引の増加もあり、上値を押さえられる展開となると、翌4/10以降も、シリア情勢緊迫化懸念などを背景に米金利が低下し、ドルが軟調に推移する中、ドル/台湾ドルは上値の重い推移となった。

月後半に入ると、台湾株が軟調に推移する中、海外資金の流出が続き、ドル/台湾ドルはドル高台湾ドル安基調で推移し、4/16には一時29.426と、2018年2月以来の水準まで上昇。その後、シリア情勢への懸念や米中貿易摩擦激化への懸念が後退し、米10年債利回りが3%台に乗せるまで上昇する中、海外資金の流出が続いたことも相俟って、ドル/台湾ドルは上昇基調で推移。4/27にかけては29.7台までドル高台湾ドル安が進行した。

月末にかけては、米金利の上昇が一服したことや、月末の輸出企業のドル売り台湾ドル買いフローからドル/台湾ドルの上値が重くなり、29.5台へ軟化する展開となった。

■ 今月の見通し

5月のドル/台湾ドル相場は、上値の重い推移を見込む。

4月に発表された経済指標をみると、3月の輸出額が前年比+16.7%と、2か月ぶりのプラスとなった。金額は299.9億ドルで、単月ベースでの過去最高を記録。台湾の主要輸出品である電子部品が同+21.5%と高い伸びとなり、全体をけん引する結果となった。仕向け地別でみても、全体の4割超を占める中国・香港向けが同+30.9%と大幅な伸びを示し、輸出の好調さが維持されていることが確認できる内容となった。貿易収支は60億ドルの黒字で、過去最高(2017年9月の66億ドル)には届かずも、高水準の黒字が続いている。また、3月の消費者物価指数は前年比+1.57%。エネルギー価格の上昇により5か月連続でのプラスとなったが、春節の影響で旅行費用が大きく上昇した前月(同+2.19%)からは伸びが減速。価格変動の大きい生鮮食品を除いたコア消費者物価指数は同+1.53%であった。

4月は米金利の動向ならびに台湾の株式市場における海外資金の動向が注目される。

米金利については、4月に米10年債利回りが一時3%台に乗せ、ドル高の要因となった。原油高やインフレ懸念の高まりを背景に、さらに金利上昇が進むこととなれば、ドル/台湾ドルは30乗せを試す展開も想定される。しかしながら、これまでもみられたように、金利上昇に米経済が耐えられないということを株式市場が嫌気すれば、株価下落により金利上昇の流れが止まるため、米金利の上昇に伴うドル高が持続的とは限らないということについては注意が必要か。

台湾株における海外投資家の動向については、直近3か月連続での資金流出が続いている。資金流出額は合計で820億台湾ドルに上っており、今後もこの傾向が続けば、4月同様にドル/台湾ドルを下支えすると予想される。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のびっくり事情』

最近、台湾ではUFOキャッチャーのお店が急速に増加しております。UFOキャッチャーの機械さえレンタルすれば簡単にはじめることができるということで、繁華街、住宅街を問わず、閉店した飲食店などの跡地に続々とオープンしております。

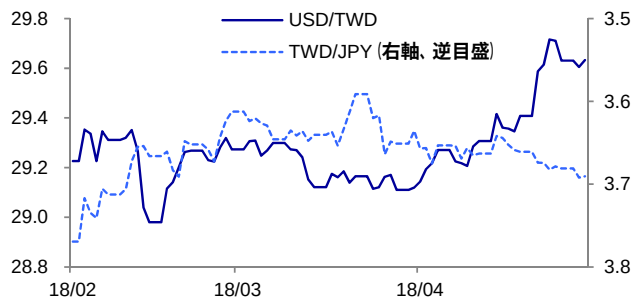
景品はぬいぐるみやアニメのフィギュアなど、日本と大きくは変わりませんが、料金は1回10元(40円弱)と安いのが特徴的です。

また、一部の機械には上限金額が設定されているものもあり、上限金額に達するまでに何も取れない場合、景品をもらうことができるというシステムもあるようです。

しかしながら、どんどんお店が増えてしまっていることもあり、UFOキャッチャーのお店で収益を上げることが難しくなってきたとのニュースもよくみられますので、今後は増加のペースも緩やかになるのではないかと思います。

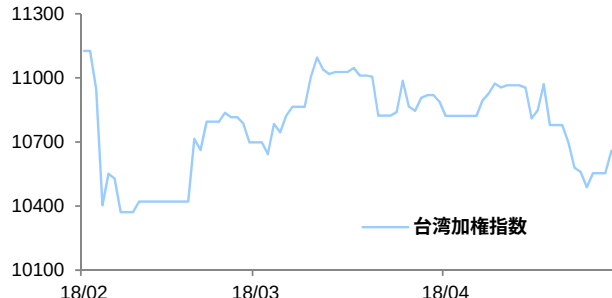
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント
4/3	外貨準備高
4/9	輸出(前年比)
4/9	輸入(前年比)
4/9	貿易収支
4/10	CPI(前年比)
4/20	輸出受注(前年比)
4/23	鉱工業生産(前年比)
4/23	失業率
4/27	GDP(前年比)

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回
3月	-	457.19B	456.72B
3月	8.40%	16.70%	-1.20%
3月	8.80%	10.40%	0.90%
3月	3.88B	6.00B	2.92B
3月	1.65%	1.57%	2.19%
3月	0.30%	3.10%	-3.80%
3月	2.10%	3.09%	-2.22%
3月	3.70%	3.67%	3.70%
Q1	3.20%	3.04%	3.28%

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.8400 ~ 7.8500
HKD/JPY 13.40 ~ 14.10

香港資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【4月の香港ドル直物相場】

ドル/香港ドルは、2005年の米ドルペッグ制導入(1米ドル=7.75~7.85香港ドル間での変動を許容)以来初となる7.85水準に達する展開を見せた。米金利及び香港ドル金利の金利差拡大がドル/香港ドルの下落に繋がっている模様。斯かる中、香港金融管理局(HKMA)は通貨防衛のために香港ドル買い介入を実施しており、約1週間で500億香港ドルもの資金を市中から吸収した。本介入より、香港ドル金利が米金利に対し徐々に追従し始める動きに、ドル/香港ドルも一時7.8415水準まで香港ドル高に転じる展開となった。ドル/香港ドル先物市場は、米国と香港間金利が更に縮小していくとの見通しを反映し、ドル/香港ドル先物の1年物は約10年ぶりとなる▲630ポイントから▲400ポイントまで上昇した。

【4月の香港ドル金利市場】

HKMAによる為替介入により、インターバンク市場の流動性を図る指標である当座預金残高は約1800億香港ドルから約1300億香港ドルまで減少。斯かる中、香港のHIBOR1か月物は1%を上回る水準まで上昇し、LIBOR1か月物との金利差は▲100bpsまで縮小した。加えて、HIBOR金利全体としても前月対比上昇しており、長期ゾーンの金利についても短期ゾーンの金利に比べ縮小幅は小さいものの、金利差自体は縮まっている状況。

【4月の香港株式市場】

ハンセン指数は、足許の香港ドル市場からの資金流出や米中貿易戦争への懸念が引き続き燃る中で、30,000水準で上値の重い展開が継続した。加えて、中国人民元建A株のMSCI新興国株式指数への組み入れを控えて香港株売り/中国株買いといったフローも散見されている模様。

■ 今月の見通し

【5月の香港ドル直物相場】

ドル/香港ドルの取引レンジは、7.840~7.850を想定する。米国と香港間の金利差は徐々に縮小傾向にあるものの、未だその差に開きはあることから引き続き米ドル買い/香港ドル売りのキャリー取引は継続しよう。加えて、中国人民元建A株のMSCI新興国株式指数への組み入れに際する中国株への資金流出が、香港ドル売り圧力を助長するだろう。一方で、茲許の香港ドル安の流れは米国及び香港ドル金利の金利差から生じる通貨の調整の動きとされ、香港当局はベースマネー規模(現金及び要求払預金等)の2倍に相当する外貨準備を保有している状況下、総じて米ドルペッグ制は今後も維持されだろうと見込む。

【5月の香港ドル金利市場】

HKMAが為替介入を通して市中から資金吸収を実施したものの、足許米ドル及び香港ドル金利の金利差は引き続き拡大していることから、今後もHKMAによる為替介入は継続されよう。斯かる中、香港ドル金利は徐々に米ドル金利に追従する展開を想定する。FRBによる更なる利上げのタイミングにもよるが、香港の金融機関は徐々に金利引き上げのステージに立たされるだろう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のびっくり事情』

日本人が香港を訪れるとよく驚かれるのは、トイレ事情である。

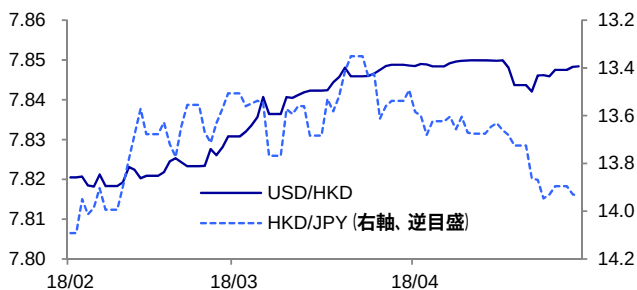
ショッピングモールの中に設置されているトイレには清掃スタッフが常駐しており、常に綺麗な状態が保たれるようになっています。ここでの特徴は、ハンドドライヤーはもちろんのこと、ハンドティッシュも装備されているところ。このことが影響しているか定かではありませんが、香港人はあまりハンカチを持ち歩く習慣がない模様です。

また、香港には公共のトイレがとても少ないです。日本であれば、駅に駆け込めば何処かしらにあると思いますが、香港の地下鉄の駅にはほとんどありません。加えて、一般的な商業ビルのトイレには、トイレに入るために鍵が必要となることがあります。(我々のオフィスにおいても、トイレに入るためにIDが必要です)

香港にご来港の際は、上記のような場合もございますのでご注意くださいと思います。

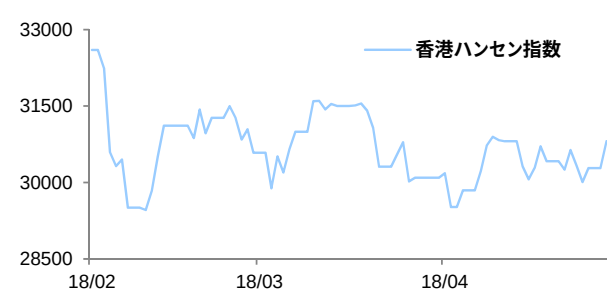
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/3	小売売上高(価格、前年比)	2月	8.00%	29.80%	4.20%
4/3	小売売上高(数量、前年比)	2月	5.90%	28.20%	2.30%
4/6	日経香港PMI	3月	-	50.6	51.7
4/9	外貨準備高	3月	-	\$440.3b	\$443.5b
4/19	失業率(季調済)	3月	2.90%	2.90%	2.90%
4/23	CPIコンボジット(前年比)	3月	2.50%	2.60%	3.10%
4/26	輸出(前年比)	3月	3.10%	8.00%	1.70%
4/26	輸入(前年比)	3月	5.20%	10.70%	-3.20%
4/26	貿易収支(HKD)	3月	-50.0b	-55.5b	-42.7b

(資料) ブルームバーク

中国人民元相場

予想レンジ:	USD/CNY	6.2000	~	6.6000
	CNY/JPY	15.45	~	17.42
	100JPY/CNY	5.7400	~	6.4700

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 馬場 一樹

■ 先月の為替相場

【為替相場】

4月のドル/人民元相場は、米金利上昇による海外市場のドル高を背景に人民元安が進行。

前月は米中間の追加関税の応酬を背景にリスク回避の動きが強まっていたものの、次第に貿易戦争への懸念が後退し、月前半のドル円は107円半ばまで上昇。ドル人民元は、中国当局が貿易対立の手段として人民元切り下げを検討との報道で一時6.32手前までドル高人民元安が進行も、その後はシリア関連を巡る地政学リスクの高まり等から海外市場でドル安が進んだことを背景に一時6.27近辺まで下落した。10日に習近平国家主席がボアオ・アジアフォーラムで中国経済の改革開放を一層推進すると約束したものの、相場への影響は限定的だった。17日には中国で第一四半期GDPが発表され、市場予想通りの結果となった他、同日夕刻には預金準備率引き下げを発表したが、前後で為替相場へのインパクトは限定的だった。月後半にかけてはコモディティ価格の上昇等も背景に米10年債金利が3%を抜けて上昇する中、主要通貨に対しドル高が進行。ドル人民元も月末にかけてドル高人民元安の動きが加速し、一時6.34台まで上昇した。

【金利相場】

月初、人民元金利市場では前月から引き続き緩和的な地合が継続する中、月末を越え金利はターム全般に亘り大きく低下。しかし、一部ノンバンク系の資金調達ニーズにより、O/N物金利については上昇する場面も見られた。その後は税金支払いに伴う資金需給の悪化に伴い1週間以内の金利が上昇していたものの、人民元の預金準備率引き下げの発表を受け、実施の25日より流動性が改善するとの見方から1週間超のターム物金利は低下。25日には預金準備率が引き下げられたものの、公開市場操作がネットで資金吸収となったことや、月末に伴う旺盛な資金調達ニーズを背景にO/N物及び1ヶ月以内のターム物金利が上昇となった。

■ 今月の見通し

【為替相場】

5月のドル/人民元相場は、引き続き海外市場動向に振られる展開を予想。

足元上昇が続くコモディティ価格や米金利主導でのドル高を受けてドル高人民元安が進行する中、引き続きドルの上昇余地を見極める展開か。貿易戦争関連のニュースには引き続き注意も、習近平国家主席からは一段と市場開放を進めていくとの発言も出てきているなど、中国側は対米姿勢を軟化させる動きを見せ始めている状況。また、23日の中央政治局会議において、当局は内需支援と資金調達コスト削減の重要性を強調しており、金融レバレッジ圧縮の行き過ぎや貿易摩擦の高まりから生じる景気の下振れリスクを抑制すべく現行の政策微調整を行う可能性もある為、今後の当局の運営姿勢に係る発言には注目。

【金利市場】

月末・労働節連休を越え月前半は資金調達ニーズが一旦落ち着くことが想定されるものの、引き続き当局による金融監督強化の動きやレバレッジ解消を企図した規制強化による中期的な金利上昇圧力は高まりには注意。3ヶ月物SHIBORも一時4%割れまで低下する等3月半ば以降金利低下が続いているものの、月末にかけては一旦4%台に水準を戻し、今後さらなる低下余地があるか状況を注視。

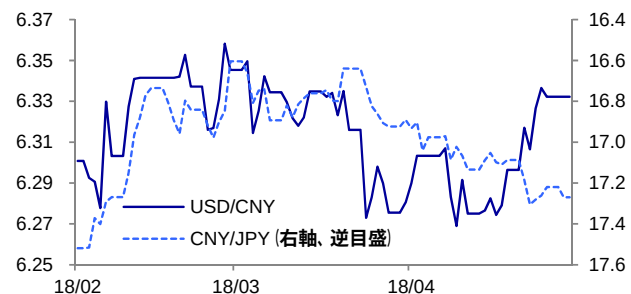
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のびっくり事情』

1年前の話になりますが、上海に着任して驚いたのは、想像以上に便利な生活が送れること。特に決済ですが、全ての精算が携帯ひとつで完結します。しかも驚きなのが、中国内のほとんどの地域で既に導入し終えていること。私は旅行好きなので、中国国内各地にバックパックするなど地方を訪ね歩いていますが、どんな街であろうと、また商業施設だけでなく道端に売っている饅頭であろうとも、相手が携帯さえ持っていればどこでも簡単に資金決済が可能です。国内普及率は相当なもので、お年寄りの方でも普通に使っているように見えるのがすごいところ。その他にもアプリですぐに旅行決済が出来たり、食事を家まで運んでくれたり、タクシーを呼んだり、物を買ったり、とにかくあらゆる動作が携帯一つで手軽に出来てしまいます。不便さを解消するスピードが早いのも驚いたことの一つ。具体例として、上海にも交通カード(東京でいうSUICA)がありますが、当初入金には駅備え付けの機械にて現金での入金を行う必要があり不便さを感じていました。しかし、携帯アプリを使って精算できる機械が導入されたのも束の間、既存の決済アプリを使用して携帯のみで電車が乗れるよう、上海市の全駅で整備されました。全て半年以内という短期間で導入に至った経緯を見ると、足元の中国の成長スピードの早さにも納得がいきます。

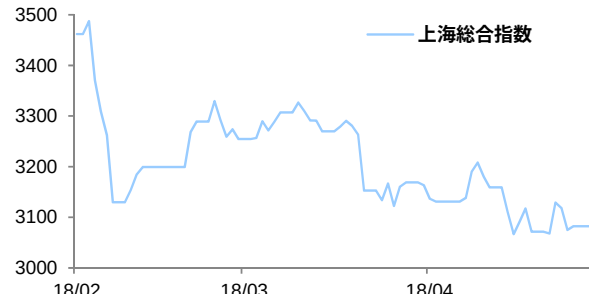
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/11	CPI (前年比)	3月	2.6%	2.1%	2.9%
4/11	PPI (前年比)	3月	3.3%	3.1%	3.7%
4/13	貿易収支(RMB建)	3月	181.0B	-29.8B	224.9B
4/13	輸出(RMB建) (前年比)	3月	8.0%	-9.8%	36.2%
4/13	輸入(RMB建) (前年比)	3月	7.5%	5.9%	-0.2%

(資料) ブルームバーク

シンガポールドル相場

予想レンジ:

USD/SGD 1.3100 ~ 1.3350
SGD/JPY 81.50 ~ 83.50

アジア・オセアニア資金部 鈴木 教子

■ 先月の為替相場

4月のシンガポールドル(SGD)相場は、月前半はMAS通貨政策発表を控えてSGDが堅調推移したが、後半は米ドル金利の上昇を背景に大幅反落した。

SGDは月初、イースター休暇で動意薄の中、1.31台前半でオープン。第1週目は米中通商問題に関する報道を材料に主要通貨や人民元で神経質な値動きがあったが、SGDは貿易摩擦激化を懸念した人民元売り、リスク回避の円買いの両方の影響を受けて方向感が定まらず、1.31台前半で揉み合い。週後半はややSGD安となり、6日には1.32手前までSGDが売られた。もう1つの注目材料であった米3月雇用統計は、非農業部門雇用者数の増加が市場予想を下回ったが、前月の急拡大の反動と見られ、相場への影響は限定的だった。

第2週は、MASの通貨政策発表を13日に控えて、MASがSGD高誘導を再開するとの思惑先行でSGDが上昇。10日に習近平中国国家主席が博鳌アジアフォーラムで、市場開放拡大の方針を強調したことも支援材料となり、SGDは1.30台後半へ続伸した。11日、12日も引き続き1.30台後半でSGD上値を試す動きとなった。この水準は今年に入って再三跳ね返された水準であり、今回は壁となった。12日は利食いで1.31台前半へ押し戻されてMAS発表待ちとなった。13日、MASは2016年4月以来継続していた中立スタンスを引き締めスタンスに変更し、SGD名目実効レートに緩やかなSGD高誘導を再開すると発表。これを受けてSGDは発表直後に一旦1.30台後半まで買われるも、予想の範囲内であり、またSGD買いポジションが積み上がっていたことから、1.31台前半へ反落して越週した。

第3週は、週末に米英仏がシリアをミサイル攻撃したことで、全般的にドルが売り気味で始まったが、シリアへの攻撃は今回一度限りで表明されたこともあり、SGD買いも1.31近辺止まり。週後半は、連日の米ドル金利上昇を背景にドル買いの流れが強まり、20日はアジア通貨が軒並み急落する中で、SGDも1.31台後半まで下落した。

第4週は、週末に北朝鮮がミサイル実験の停止と核実験施設の廃棄を表明したことから、リスク回避の巻き戻しでドル円が108円台後半まで急上昇するなど、対主要通貨でもドル高の流れが強まったことで、SGD売りも加速。25日は米10年債利回りが4年3か月ぶりに3%台に乗せたことでアジア通貨が軒並み安とる中、SGDも1.33日前まで売られ、3か月ぶり安値をつけた。しかし週後半は売り圧力が一服し、利食いで1.32台前半まで戻している。

■ 今月の見通し

5月のシンガポールドル(SGD)相場は米ドル金利上昇に伴うアジア通貨安の流れが継続し、SGDもやや弱含み推移を予想。

シンガポール通商産業省が発表した1～3月期GDP速報値は、前年比+4.3%と昨年10～12月期の+3.6%を上回る好調な結果となった。セクターによってばらつきがあり、また世界経済拡大ペースの鈍化が予想されていることから、外需を中心に頭打ちとなりそうだが、それでも2018年通年では予想レンジ+1.5～3.5%の半ば以上の水準が達成できそうとの見通しである。加えてMASが2年ぶりに中立スタンスから引き締めスタンスにシフトし、名目実効レートベースのSGD高誘導を再開した。ファンダメンタルズを見ると、SGDは引き続き底堅い推移が期待できそうだ。

しかし一方で、原油価格の上昇に伴うインフレ圧力の高まりや、シリア・朝鮮半島の緊張緩和によるリスク回避の巻き戻しなどから米ドル金利が上昇してきており、アジアからの資金流出リスクが高まっている。シンガポールの国際収支は安定しており、パニック的なSGD売りは想定し難いが、全般的なドル高の流れには逆らえないだろう。4月のMAS発表によると、過去半年間に亘ってSGDの実行レートは政策バンドの上半分(SGD高方向)で推移してきたため、MASがバンドを緩やかにSGD高方向にシフトしても、SGDの下値余地は残されている。テクニカル的にも1.30台は年初から再三下押しして抜けられなかった水準であり、対主要通貨やアジア通貨でドル高が進めば、SGDもその流れに沿って、過去半年のSGD高の調整サイクル入りする可能性が高そうだ。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のびっくり事情』

当地に来てびっくりしたことはいくつかありますが、一番は罰金の厳しさでしょうか。タバコやゴミのポイ捨てに罰金が科されるというのは有名な話だと思いますが、それ以外にもいろいろと罰金制度があります。

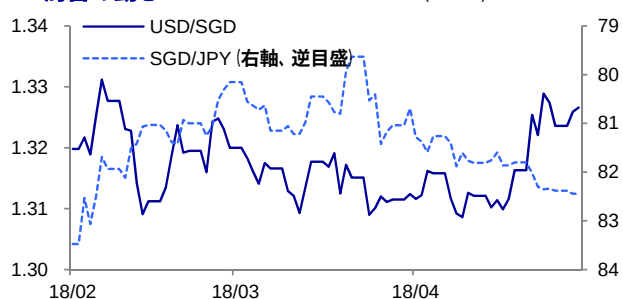
- ・チューイングガムの国内持込み SGD 10,000
- ・横断歩道、歩道橋を利用せずに道路を横断 SGD 50
- ・公衆トイレで利用後に水を流さない 最高SGD 1,000
- ・鳥への餌やり 最高SGD 1,000
- ・ツバや痰を吐いた場合 最高SGD 1,000
- ・MRT(電車)での飲食、MRTへのペット動物の持ち込み SGD 500

上記以外で面白いと思った罰則は、「MRTへのドリアンの持ち込み SGD 500」でしょうか。確かにドリアンは強烈な匂いですから、密室空間への持ち込みは罰金に値すると言っていいのかもしれませんが。

ともあれ、これらの厳しい罰金制度のおかげで、シンガポールの綺麗な街並みや治安が保たれているとも言えますので、マナーに気を付けつつ日々シンガポール生活を送っていきたいと思います。(小川)

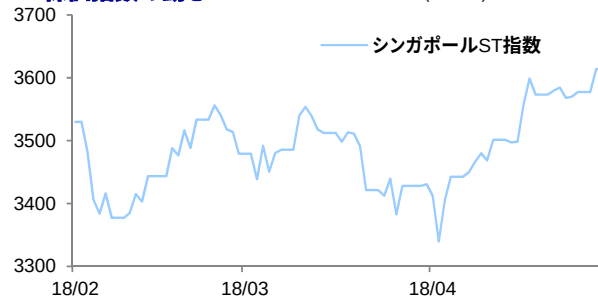
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/2	購買部景気指数	3月	52.8	53.0	52.7
4/2	電子産業指数	3月	-	52.4	52.1
4/12	小売売上高(前年比)	2月	4.9%	8.6%	-7.8%
4/13	GDP(前年比)	1Q	4.3%	4.3%	3.6%
4/17	非石油輸出(前年比)	3月	2.4%	-1.8%	-2.7%
4/23	CPIコア(前年比)	3月	1.7%	1.5%	1.7%
4/26	鉱工業生産(前年比)	3月	5.7%	5.9%	6.7%

タイパーツ相場

予想レンジ:

USD/THB 31.00 ~ 31.70
THB/JPY 3.40 ~ 3.50

バンコック資金室 井上 由貴

■ 先月の為替相場

●ドルパーツは月後半に急反発。
上旬、ドルパーツは横ばい。月初2日、タイ商務省から3月消費者物価指数が発表され、前年比+0.79%上昇と市場予想(同+0.97%)を下回る内容だったが、市場の反応は限定的。海外時間に入り、米中の貿易摩擦に対する懸念やハイテク企業の先行きに対する警戒感から米株式市場が軟調に推移すると、リスクオフムードからドル買いが優勢となるとドルパーツは31.20台前半まで反発。3日は海外からの投資フローにサポートされて31.10台後半へ下落したが、4日には、中国から米国の関税措置に対する報復的な追加関税について発表すると、リスクオフムードから31.20台前半まで上昇。その後6日の休日を挟んで31.20台後半で動意なく推移。10日にはアジアフォーラムにおいて、中国の習近平国家主席が演説で、自動車等の輸入関税引き下げや外国企業への市場参入規制など、改革・開放政策の維持が表明されたことで、米中貿易摩擦懸念が後退し、リスクオフの巻き戻しからドルパーツは31.20近辺へ下落。
中旬、ソンクラン休暇で薄商い。11日に公表されたタイ中央銀行金融政策委員会(MPC)議事録では、特別目新しい材料は無かったが、政策金利の決定において意見が割れたことは金融正常化へのシグナルではないと述べられた。ソンクラン休暇前に流動性が乏しい中で、対円でのドル売りにドルが売られたことで、ドルパーツは月安値となる31.10台前半まで下落。13日~16日はタイ休日であり、積極的に下値を試す展開にもならず31.20近辺まで反発。連休明けの17日以降も実需勢が引き続き休暇モードで目立った材料のない中31.20台後半までじりじりと上昇。
下旬、ドルパーツは急反発。米中貿易摩擦やシリア情勢懸念が後退したことでリスクオンムードから米債売りが加速、米金利が上昇すると、ドル買い優勢となり、ドルパーツは31.30パーツを突破。23日には北朝鮮がミサイル実験の停止と核実験施設の廃棄を表明するとリスクオンからドル円が急伸、ドルパーツも上昇基調。商務省が発表した3月貿易統計では輸出が前年比+7.06%と市場予想を上回る好調を見せるも反応は限定的。米10年債利回りが3%を突破し、米ドル買いが加速する中、ドルパーツの上昇は止まらず2月下旬以来となる31.60台をつけた。タイ債券市場からの資金流出も顕著であり、タイ国債利回りも急上昇している。

■ 今月の見通し

●ドルパーツの上値は限定的。
北朝鮮の南北首脳会談では完全な非核化が宣言され、年内に戦争状態を終結させることで合意。米中貿易摩擦懸念の後退や原油をはじめとしたコモディティ価格の上昇にもサポートされる形で米10年債利回りは重要な節目である3%台に乗せた。米債利回り上昇を背景に為替マーケットではドル選好が強まっており、アジア通貨全般的に売られる展開となっている。パーツも例外ではなく、ドルパーツは約2ヶ月ぶりの水準となる31.60台まで上昇している。しかし、米10年債利回りの上昇も3%をつけた達成感からか更なる上昇の勢いは感じられず、5月に入った後は株式相場下落も意識される中、為替も利食いのドル売りが優勢になりそうである。
タイ国内要因に目を向けると、年明け以降流入が加速していたタイ債券市場からの海外投資家の資金流出が顕著であり、TBMA(タイ債券市場協会)のデータによれば4月の資金流出額は24億パーツ弱にも達しており、パーツ下落の原因ともなっている。ドルパーツの急伸を受けて、オフショアマーケットではスポットレートの上昇に連れる形でスワップディスカウントが急速に縮小(オフショア金利が上昇)している。タイ中銀は昨年4月より資金流入過多を背景として発行を絞っていた短期債について、5月より発行額を増額するとも発表しており、足もとのパーツ金利上昇がどの程度継続するかに関しては引き続き注目していきたい。今月16日にはタイ中央銀行金融政策委員会(MPC)が開催される。今回の短期債発行増額は金融政策の見直しには無関係と明言しているが、前回3月28日のMPCでは利上げを主張するメンバーが現れており、今回の票の行方もパーツ相場の波乱要因として注意が必要である。
ファンダメンタルズは引き続き良好。商務省が発表した3月貿易統計では輸出、輸入とも前年比プラスであり好調をキープ。27日には財務省も今年の輸出見通しを前年比+8%増に上方修正(従前は同+6.6%増)しており、パーツ高見通しが継続する中でも当局のタイ経済への見通しはあくまで強気である。コモディティ価格の上昇、米金利の上昇はドルのサポート要因ながら、タイのファンダメンタルズを反映し上値は限定的とみている。

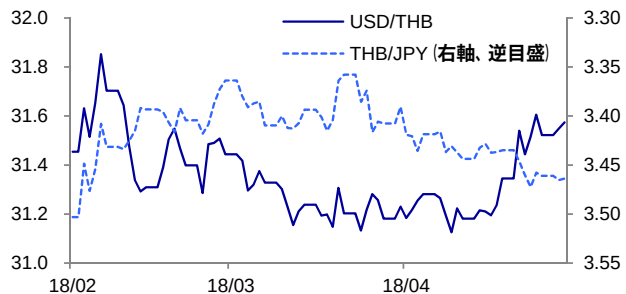
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

●当地のびっくり事情
ありすぎて、挙げ切れません。
・街中の電線が私たちの頭より低い位置を通っている。
・その電線が絡まりあっており、知らぬ間に電気が盗まれているらしい。
・老朽化した電線も絡まったまま放置。
・肉の内臓も生で食べる。
・本名が長すぎて、タイ人同士でも本名を知らない(ニックネームなら知ってるけど。という反応)。
・本名が長すぎて、発音も難しく、タイ人同士でも噛み噛み。
・本名が長すぎて、クレジットカードの表面に記載しきれない。
・何でもない日なのにちよくちよく街中で花火が上がる。(お金持ちタイ人男性が、恋人のために自費で花火上げてるという理解)
・服屋さんの店員が店番しながら堂々とご飯食べてる。
・男性の同僚を紹介されているはずなのに、”She is...”と説明される。

まあ、すべては「マイペンライ」(気にしない)なのです。自分のミスなのに「マイペンライ」といわれると、日本人的には若干カチンと来ますが、それも含めてマイペンライ。タイ人の笑顔を見ているとどうでもよくなり、自分もだんだんタイ人化してきたと思う今日この頃でございます。(井上)

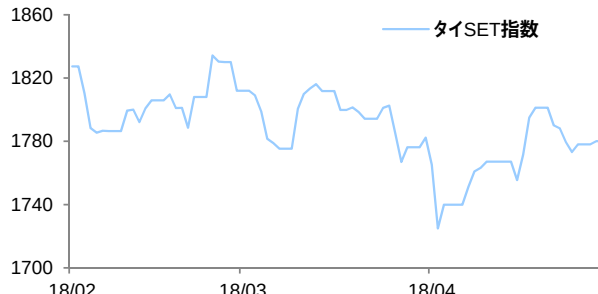
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/2	消費者物価指数(前年比)	3月	0.97%	0.79%	0.42%
4/2	CPIコア(前年比)	3月	0.64%	0.63%	0.63%
4/5	消費者信頼感景気指数	3月	-	66.80	66.20
4/23	輸出(通関ベース/前年比)	3月	6.00%	7.06%	10.26%
4/30	輸出(前年比)	3月	-	6.3%	7.7%
4/30	輸入(前年比)	3月	-	6.3%	21.8%
4/30	貿易収支	3月	-	\$3015M	\$2289M
4/30	経常収支	3月	\$4400M	\$5751M	\$6157M

マレーシアリング相場

予想レンジ:	USD/MYR	3.8500	~	3.9500
	MYR/JPY	26.60	~	28.57
	JPY/MYR	3.5000	~	3.7600

マレーシアみずほ銀行 山田 輝彦

■ 先月の為替相場

4月のリングgitはじりじりと売られる展開となった。月初めののリングgitは3.86台前半で寄り付くと、人民元の動きに合わせ午前中には年初来リングgit高値を更新する3.8530を付けた。しかし人民元が米中貿易摩擦激化を懸念して軟調な動きを見せたことに連動しリングgit買いは手控えられる展開となり、3.86台での膠着状態となった。6日昼頃にナジブ首相が記者会見を開き7日に臨時国会を召集し下院を解散すると発表した。市場の反応は限定的。その後シンガポール政府がシンガポールドル高誘導を再開するのではとの思惑でシンガポール高となるのに連れられ、リングgitも堅調に推移した。その後は米中貿易摩擦に関連した一連の報道に狭い値幅で上下したが、シリア情勢の緊迫化を受けたリスク回避の動きにリングgitは11日以降はじりじりと売られる展開となった。13日には実際にシンガポール金融管理局が緩やかなシンガポール高誘導を発表するも、景気判断があまりタカ派の内容ではなかったことで、市場インパクトは小さく、リングgitは3.87台後半で取引を終えた。

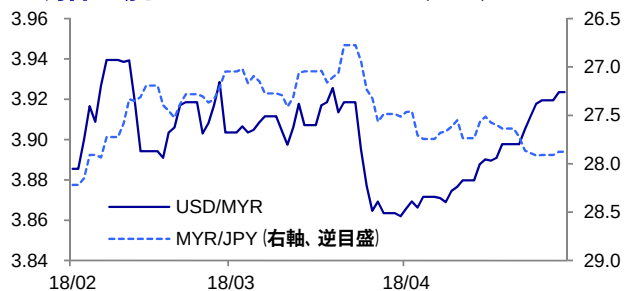
月半ばのリングgitは13日米時間夜の「米英仏がシリアをミサイルで攻撃」との報道に、軟調な展開。「本年の米利上げはFRBボードの予想中央値以上に必要」とのボストン連銀総裁コメントによるドル高もリングgit売りを誘った。注目された米財務省の半期為替報告書では事前予想通り為替操作国の指定はなく、市場の反応も限定的だった。シリア攻撃は一過性のものと見方からリングgitは17日に一旦反発するも、堅調な米企業決算や米債利回り上昇を背景としたドル高の動きにリングgitは軟調に推移し、3.89台後半で取引を終えた。

月後半もリングgitは売り圧力にさらされる展開となった。週初から米国債増発や原油価格上昇によるインフレ圧力を背景に、米10年債利回りが4年ぶりに3%に接近し、アジア通貨が全般的に売られる中。リングgitも3.90ちょうどレベルまで下落。その後、米金利上昇を受けたマレーシア10年国債利回りも1年ぶりの4.0%水準へ上昇し、リングgitは3.90台まで滑落。26日にECBが予想通り政策据え置きも総裁会見でハト派スタンスが確認されたためドル高となる展開にリングgitは3.9230を一時的付けた。

30日9:30現在、リングgitは3.92ちょうどレベルで取引されている。

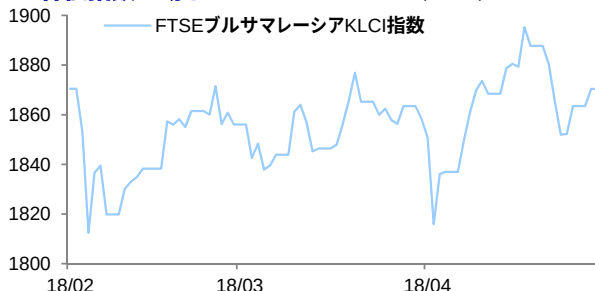
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/5	輸出 (前年比)	2月	8.0%	-2.0%	17.9%
4/5	輸入 (前年比)	2月	7.1%	-2.8%	11.6%
4/5	貿易収支 (MYR)	2月	7.90B	9.71B	7.25B
4/11	鉱工業生産 (前年比)	2月	3.3%	3.0%	5.4%
4/11	製造業売上 (前年比)	2月		4.9%	10.8%
4/18	CPI (前年比)	2月	1.6%	1.3%	1.4%
4/20	外貨準備高 (USD)	4/13		103.6B	103.7B

(資料) ブルームバーク

■ 今月の見通し

5月のリングgitは引続きイベントリスクに振られる展開を予想。

最大のポイントは5月9日に実施される総選挙。与党有利とされているが、選挙開票が長引く、または野党が勝利を収めるという展開になった場合には、先行き不透明感からリングgit売り圧力が強まる可能性がある。

また和解に大きく前進している朝鮮半島動向、軍事的緊張が落ち着きを見せつつあるシリア情勢についても米国動向次第では再び緊張が高まる可能性も否定できず、地政学リスクは依然残存すると考えておいた方が良いかもしれない。

今月は第1四半期GDPの発表が予定されており、好調な国内経済を確認するような内容になるものと思われるが、弱めの数字が出た場合には完全に追加利上げの期待感は剥落するものと思われ、上記イベントも踏まえればリスクオフの方向には注意を払っていたほうが良いのではないかと。

ただ逆にイベントを無難に通過し、良好な国内景況感が確認される展開になれば、再びリングgit高の展開になるものと予想する。

■ 今月のつぶやき (現地からの声)

『当地のびっくり事情』
当地に来て4年も経つと、何事にもあまりびっくりすることがなくなってしまい、今回のお題もなかなか悩むところではありますが、最近改めて思ったのはホテル代が安いということでしょうか。当地に住んでいるのでホテルに泊まるという発想をあまり持ちませんでしたが、先日、後輩が遊びに来るということで感覚的に「マレーシアは高級ホテルもかなりお手ごろ価格で泊まれるから、立地条件優先で予約しなよ」と伝えたところ、ウェスティンが1万円そこそこで取れましたと連絡が。実際にネットで調べてみたところ、もちろん時期にも拠るでしょうがリッツカールトンでも2万円台前半で泊まれるようです。

マレーシアは豊かだけれども、他のアセアン国に比べて人口が少ないのが今後のネックになるのではと言われることがあります。逆に人口が少なく地価の上昇が他国に比べれば抑えられているが故に、このような状況が生まれているのでしょうか。勿論、上昇傾向が続いてはいるもののまだそこまで高くはない人件費に拠るところも多いのでしょうか。

マレーシアに来られる際は、是非リッチな旅行プランをお立て下さい。

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR 13600 ~ 14100
 IDR/JPY 0.75 ~ 0.80
 JPY/IDR 124.00 ~ 134.00

(注) 100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 河合 良介

■ 先月の為替相場

4月のドルルピアは、13735～13935のレンジでの推移となり、約2年3か月ぶりのルピア安水準をつけた。

月初から下旬にかけて、ルピア売りフローが散見されていたものの、13800近辺では、インドネシア中央銀行によるルピア買い介入観測もあり、13750～13800での狭いレンジが続いた。その間、13日にはムーディーズがインドネシア格付の1段階引き上げを発表した直後は、50ポイント程度下落したが、反応は限定的であった。

19日、インドネシア中銀中央銀行が、7か月連続で政策金利を据え置いたが、翌20日に、米金利上昇による海外投資家による資金流出に加え、大口配当金に関わるルピア売りが持ち込まれると、ドルルピアは13900近辺まで急騰。

翌週23日以降も、海外投資家主導のルピア売り圧力は止まらず、インドネシア中央銀行は、24日には、「中銀は為替市場と国債市場で大規模な介入を実施した。」と表明しつつ、介入を継続した模様。

26日には、ドルルピアは、一時13935まで上昇したが、米10年債利回りが、3%を下回ると、市場は一旦落ち着きを取り戻し、結局、ドルルピアは、13910近辺で取引を終了した(4月30日終了時点)。

20日のドルルピア急騰以降、中央銀は、「大規模な介入の実施」を表明したことに加え、国民に冷静な対応を、企業にはルピア売り取引集中を回避するため、為替ヘッジを行うよう、呼びかけた。また、27日には、「ルピアが下落する中で安定維持に必要ななら、政策金利を引き上げる余地がある。」との見解を示し、ルピア相場の安定に向けた対策を講じている。

この間、ジャカルタ株価総合指数は下げがとまらず、5か月ぶりの6000割れとなる5994.60で取引を終えた。

■ 今月の見通し

今月のドルルピアは、先月に引き続き、ルピア売り圧力がかなりやすい展開を予想する。

先月は、米金利上昇に端を発したアジア通貨売りの中で、ルピアも売られ、約2年3か月振りのルピア安水準をつけた。

この間、インドネシア10年国債は、約0.7%上昇、海外投資家も保有残高を約25兆ルピア(保有残高全体の約3%)減らし(4月26日時点)、ジャカルタ株価総合指数も、5ヶ月ぶりの6000割れまで下落。

月末にかけて、市場は一旦落ち着きを取り戻したものの、先月、本欄にて記載した通り、現状インドネシアのポジティブな材料なく(ムーディーズによる予想外の格上げにも、ルピア買い反応は限定的であった)、メインシナリオとしては、ルピア安バイアスがかかる中、中銀が13900～14000を防衛線に通貨安定を試みる展開を予想する。

しかしながら、2015年9～10月にかけて起こった月末のドルルピア急騰からの月初の急落があったように、月末のルピア売りフローが落ち着いた段階で、相場引き下げのための大規模なルピア買い介入の可能性も否定できない。

今月は、先月のルピア売り圧力増大の中で、中央銀行がどの程度外貨準備を費消したか確認する意味で外貨準備高に注目が集まるのに加え、1～3月期の経常収支赤字幅が拡大していると、更にルピア売り圧力に拍車がかかる可能性もある。

インドネシア中央銀行の金融政策は、不安定な為替動向を勘案、8か月連続の据え置きを予想するが、ドルルピアが急騰(ルピアが急落)する局面では、中央銀行発表の通り、利上げの可能性もある。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のびっくり事情』

ここ最近の難しいお題から反転、これはたくさんあるぞ、と思ったのですが、いざ、書き始めようとなかなか出てきません、、、。

これは、当初びっくりしていたことが、約4年間インドネシアに関わる仕事をしているうちに、驚かなくなったことに起因するのだと思います。

そんな中で、今だに違和感を感じるものがあります。

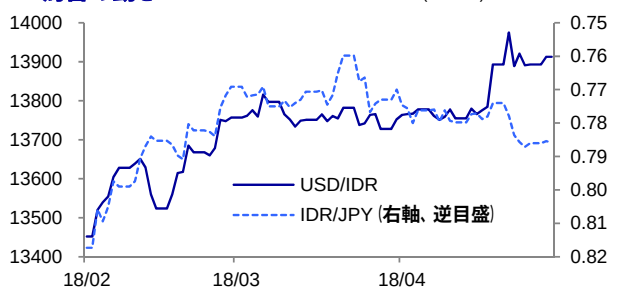
食堂などで、麺類を、その他の食べ物と同じようにゆっくりと食べるため、のびきった麺をいつまでも、ゆっくり食べられる現地の方々です。

我々ですと、ラーメン屋に行って晩酌するとしても、まずはメンマや餃子を肴に、お酒を飲み、締めとして麺を注文、食する時は、皆黙々とたいらげる、という流れですが、こちらの方々は、基本、お酒を飲まないの、料理は一斉にオーダー、おしゃべりを楽しみながら、ゆっくり食べます。

ローカル社員と食事をした際、このミー(麺)は美味しいから食べてみる、と言われて、汁を完全に吸いきった麺を食べた時の感想は、皆さまの想像にお任せしたいと思います。

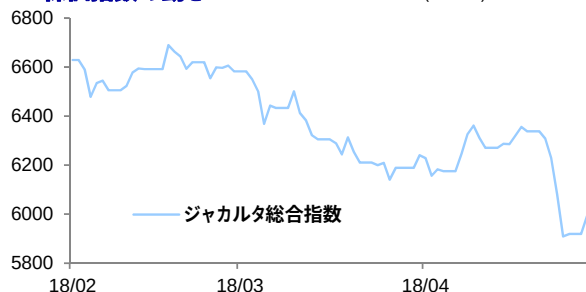
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/2	CPI (前年同月比)	3月	3.35%	3.40%	3.18%
4/6	外貨準備高(USD B)	3月	-	128.1	126.0
4/16	輸出 (前年比)	3月	3.00%	6.14%	12.04%
4/16	貿易収支(USD M)	3月	-89	1,092	-53
4/19	BI 7daysリバースレポ金利		4.25%	4.25%	4.25%

(資料) ブルームバーク

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 51.00 ~ 52.50
PHP/JPY 2.00 ~ 2.20

アジア・オセアニア資金部 マニラ室 樋上 陽一

■ 先月の為替相場

4月のドルペソ為替相場(オンショア・インターバンク市場)は、1米ドル＝52.13ペソで取引開始。

4月2日に米国の鉄鋼・アルミニウム輸入に対する追加関税への対抗措置として、中国が米国からの輸入品128品目に最大25%の追加関税を賦課すると発表、4日には農産物や自動車を含む米製品106品目に対し25%の追加課税を課す方針を示したことで、米中貿易戦争への警戒感が強まった。本来はリスクオフによるドル買いとなる材料だが、6日の米3月雇用統計の発表を前に市場では引き続き、ペソ買い戻し圧力が強く、1米ドル＝52ペソ丁度レベルで指標を迎えた。

米3月雇用統計は非農業部門雇用者数が前月比+10.3万人(市場予想+18.5万人)にとどまり、その後、パウエルFRB議長の講演では『米国経済は良好』、『利上げは緩やかなペースで実施される』と示唆されたものの、雇用統計の数字からは利上げ観測は高まらず。

米雇用統計を受けての10日のドルペソ為替相場は、前週終値ほぼ同水準の1米ドル＝52.015ペソで取引開始。米ドル金利の利上げ期待剥落や、米中貿易摩擦懸念の後退によりドルの下値を探る展開に。11日には1米ドル＝52ペソを割り込み、1米ドル＝51.91ペソで取引される場面もあった。しかしながら、同日発表された比2月財政収支が赤字に転落、比2月貿易収支が市場予想より赤字幅が拡大したことを受け、またシリア情勢を巡る緊張が高まると安全資産のドル買い需要にも支えられ、ドルペソ為替相場の下値は固くなった。

16日に発表された比2月OFW(海外在留フィリピン人労働者)送金実績は22.7億ドル。前年同月比で4.5%の増加となったが、前月から減少、市場予想対比で少なかったことが材料視され、ペソ売りで市場は反応。再び1米ドル＝52ペソ台に。

月末にかけては米10年債金利が2014年1月以来の3%台に上昇したことでドル買いとなり、25日には一時、1米ドル＝52.38ペソで取引されたが、地政学リスクの急速な後退や連日下落していた米株式市場に歯止めがかかったこと、フィリピン中銀の金融政策に対するスタンスが変わった(詳細右記)との思惑もあり、1ドル＝52ペソ台を割り込んでペソの買い戻しが進んでいる。(4月30日10時現在)

■ 今月の見通し

ペソ買い材料は乏しいのだが・・・

フィリピンの収支面や外国人投資家のフィリピン株売買動向(4月23日の週まで13週連続で売り越し)はペソ売りを示唆。米金利上昇によるドル選好、一方、地政学リスクが高まれば、安全資産のドル買い。

2月の中旬にドルペソ為替相場は1米ドル＝52ペソ台に乗せ、その後は1米ドル＝52ペソを挟みでの揉み合いとなっている。日次の終値ベースでみれば、2月14日以降、4月27日までで日次終値が1米ドル＝52ペソを割りこんだのは9日間のみ。『52』という水準が定着してきた印象を受ける方が多いのではないだろうか。

ドル高ペソ安の流れは不変と予想しているものの、ドルの上値が重いのも事実。

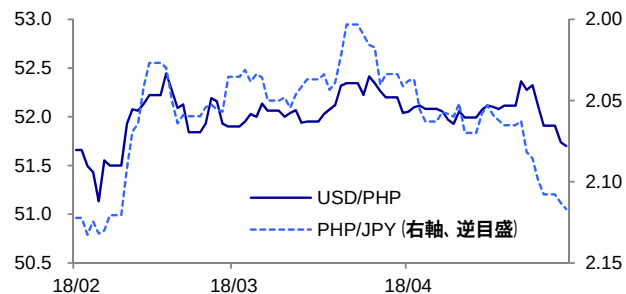
要因としては、過度なペソ安の値動きを抑制する当局の動きに市場参加者が神経質になっていること、また年初から進んだペソ安のポジション調整が不十分であること、などが挙げられよう。2か月半の揉み合いを終えて相場は動き出すきっかけを探している。

斯かる状況下、気になるのは市場で急速に利上げ観測が高まっていること。フィリピン中銀は、これまで利上げには慎重姿勢だったが、インフレ抑制として次回(5月10日)の金融政策委員会で利上げの可能性も。市場環境もリスクオンになっている中、利上げによる市場へのインパクトを緩和できるとの判断もしやすい。

とすれば、ドルペソの下値を探る展開も想定しておいた方がよさそう。

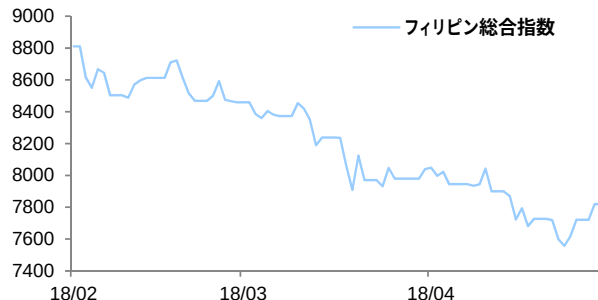
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日 イベント
上記参照

(資料) ブルームバーク

期間 予想 結果 前回

インドルピー相場

予想レンジ:

USD/INR 64.00 ~ 67.50
INR/JPY 1.61 ~ 1.69

アジア・オセアニア資金部 インド室 田川 順也

■ 先月の為替相場

【4月の米ドル/インドルピーは急激に上昇する展開】

65.11レベルで当月取引をスタート。3日にインド準備銀行(中央銀行、RBI)の会合があったが、内容に目新しさはなく相場に対する影響は限定的となり、週を通して65ちょうどレベルで方向感の出ない展開だった。翌週はシリア情勢を巡り米露関係の悪化が懸念されるとリスク回避的な動きの中でルピーも売られ、ドル/ルピーは65.31にあった年初来高値を更新。ただ、インド3月CPIや2月鉱工業生産が事前予想比良好な内容となると上昇一服。65.25レベルで越週。

3週目週初は前週に続きシリア情勢がリスクセンチメントを圧迫する中、週半ばからWTIが65ドルを明確にブレイクしたことからインドの貿易収支悪化が想起されるルピー売りが先行。ドル/ルピーは昨年3月以来となる66.00を上抜け、その後も上値を追い続けて高値引け。

4週目に入っても状況は変わらず、また米国債利回りが節目となる3%を上抜けると新興国からの資金流出が一段と進行。ドル/ルピーは66.97まで上値を伸ばし、27日執筆時点で66.75近辺で取引されている。

【4月のインドルピー/日本円は方向感の出ない展開】

1.63レベルで当月取引を開始。注目されていた米中通商交渉が軟化する様子に106円近辺で取引されていたドル/円が107.50を試す動きにルピー/円も当月高値となる1.656を示現。その後もドル/円は107円台前半での推移が続いたが、上述のようにルピーが対ドルで減価したことからルピー/円は緩やかに下落。

終盤にかけてはドル/円が108円を越えていくドル高/円安展開を見せるもドル/ルピーも上昇しており、ルピー円への影響は限定的となった。27日執筆時点で1.635近辺で取引されている。

■ 今月の見通し

【5月のドル/インドルピーは上値の重い展開を想定】

先月発表されたRBIのレポートでは成長率予想を今年度7.4%、来年度を7.7%とし、強気の内容となった。また物価について4月発表値は4.10%と前月からは減速したといえ、事前予想を上回る内容となっていることに加え、コア物価については5.2%(前月5.0%)と上昇。また4月は左記のように原油価格が上昇していることから今後の物価の上昇圧力も期待がかかる。また製造業PMIについても2017年度平均して51.5と好不況の節目となっている50を上回る結果となっている。

強気な中銀予想や良好な経済指標を横目に、先月マーケットを動かす要因となったのは「原油高=ルピー売り」という図式であり、アジア新興国の中では経常赤字国であるインドルピーやインドネシアルピアの売りが目立った。油価の上昇が落ち着けばインドのファンダメンタルズにも注目が集まることだろう。

併せて、ドル/ルピーは一か月で3%近い変動となっており、更に上昇する場面ではRBIの為替介入も視野に入るだろう。

また現状米国債利回りの上昇が主導するかたちで大きくドル高が進行したが、これには2つの点で疑問を持っている。1つ目は4月につけた10年債3%は4年4か月ぶり水準となるが、この間米中央銀行から政策の変更や従前示してきた今後の政策運営予想の変更はでていない。当月発表の米経済指標について物価や雇用が劇的に回復しているような内容ではない。次点に、このようなことから米株式市場は下落しており、これは恐らくトランプ大統領が望まないことである。これらのことを勘案すれば現状の金利の動きがオーバーシュートしているように見える。金利の動きが落ち着くことでドル高圧力が減少していく展開を想定している。

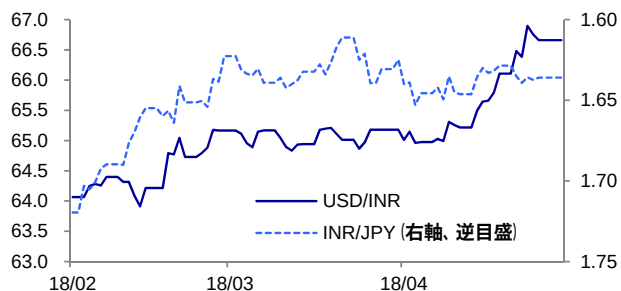
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のびっくり事情』

コンロがないからアイロンのプレート面に鍋をのせてチャイ(ミルクティー)を作ってしまう、オートバイを無理矢理改造して6人乗りのタクシーシーにになってしまう、結婚式で大勢に振る舞いたいから洗濯機をミキサー代わりにしてラッシーを作ってしまう、こんなびっくりな、そしてなんともインドらしい発想の数々、これらはジュガード(Jugaad)精神と呼ばれています。このジュガード精神を利用したビジネス成功例の一つに電気を必要としない粘土製の冷蔵庫「Miticool」があります。村の人々を当初ターゲットにしていたのが現在では品質の改良を続け(値段は約5000円ほど)、今では生産が追いつかないほどの人気商品になっているとか。このジュガード精神ですが、限られた資源、環境の中で新たなものを創り出すスピリットとしてアメリカのビジネススクールやシリコンバレーで取り上げられて洗練され、今ではビジネスモデルとしても様々な国に浸透しているようです。(ニューデリー支店 長谷川)

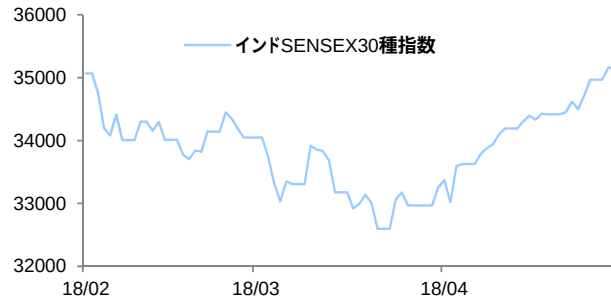
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

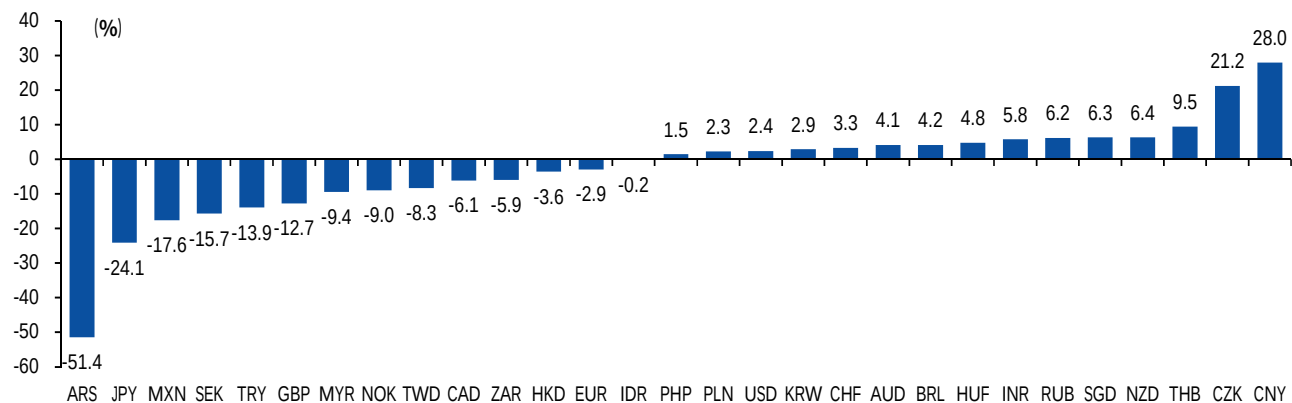
発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/3	日経インドPMI製造業	3月	-	51.0	52.1
4/5	政策金利	-	6.00%	6.00%	6.00%
4/12	消費者物価指数(前年比)	3月	4.10%	4.28%	4.44%
4/13	輸出(前年比)	3月	-	-0.7%	4.5%
4/13	輸入(前年比)	3月	-	7.2%	10.4%

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2017年末	2018年4月末	騰落率	株式市場	2017年末	2018年4月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	24719.22	24163.15	-2.2%	-
日本	USD/JPY	112.69	109.34	-3.0%	日経平均株価	22764.94	22467.87	-1.3%	1.7%
ユーロ圏	EUR/USD	1.2005	1.2078	0.6%	ドイツDAX指数	12917.64	12612.11	-2.4%	-2.4%
英国	GBP/USD	1.3513	1.3763	1.9%	ロンドンFTSE100指数	7687.77	7509.3	-2.3%	-4.1%
豪州	AUD/USD	0.7809	0.753	-3.6%	S&P/ASX200指数	6065.129	5982.732	-1.4%	2.3%
カナダ	USD/CAD	1.2571	1.2843	2.2%	S&Pトント総合指数	16209.13	15607.88	-3.7%	-5.7%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	6.5068	6.3322	-2.7%	上海総合	3307.172	3082.232	-6.8%	-4.2%
香港	USD/HKD	7.814	7.8483	0.4%	香港ハンセン	29919.15	30808.45	3.0%	2.5%
インド	USD/INR	63.8725	66.6613	4.4%	インドSENSEX30種	34056.83	35160.36	3.2%	-1.1%
インドネシア	USD/IDR	13555	13913	2.6%	ジャカルタ総合	6355.654	5994.595	-5.7%	-8.1%
韓国	USD/KRW	1067.4	1068.05	0.1%	韓国総合株価	2467.49	2515.38	1.9%	1.9%
マレーシア	USD/MYR	4.0465	3.9235	-3.0%	ブルサマレーシアKLCI	1796.81	1870.37	4.1%	7.4%
フィリピン	USD/PHP	49.85	51.741	3.8%	フィリピン総合	8558.42	7819.25	-8.6%	-12.0%
シンガポール	USD/SGD	1.336	1.3259	-0.8%	シンガポールST	3402.92	3613.93	6.2%	7.0%
台湾	USD/TWD	29.733	29.605	-0.4%	台湾加権	10642.86	10657.88	0.1%	0.6%
タイ	USD/THB	32.574	31.549	-3.1%	タイSET	1753.71	1780.11	1.5%	4.8%

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート (REER) の1994年以降の平均からの乖離 (2018年3月時点)



■ 実質GDP成長率

	2016Q3	2016Q4	2017Q1	2017Q2	2017Q3	2017Q4	2018Q1	2016	2017
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	2.8	1.8	1.2	3.1	3.2	2.9	2.3	1.5	2.3
日本*	0.9	1.1	1.9	2.4	2.4	1.6		0.9	1.7
ユーロ圏	1.7	1.9	2.1	2.4	2.7	2.8		1.8	2.4
英国	2.0	2.0	2.1	1.9	1.8	1.4	1.2	1.9	1.8
豪州	2.1	2.5	1.9	2.0	2.9	2.4		2.6	2.3
カナダ*	4.3	2.3	3.7	4.3	1.7	1.7		1.4	3.0
エマージングアジア									
中国	6.7	6.8	6.9	6.9	6.8	6.8	6.8	6.7	6.9
香港	2.2	3.3	4.3	3.9	3.7	3.4		2.1	3.8
インド	7.6	6.8	6.1	5.7	6.5	7.2		7.1	0.0
インドネシア	5.0	4.9	5.0	5.0	5.1	5.2		5.0	5.1
韓国	2.7	2.6	3.0	2.9	3.8	2.8	2.8	2.9	3.1
マレーシア	4.3	4.5	5.6	5.8	6.2	5.9		4.2	5.9
フィリピン	7.1	6.6	6.4	6.7	7.0	6.6		6.9	6.7
シンガポール	1.7	3.7	2.5	2.8	5.5	3.6	4.3	2.0	3.6
台湾	2.0	2.8	2.6	2.3	3.2	3.3	3.0	1.4	2.9
タイ	3.1	3.0	3.4	3.9	4.3	4.0		3.3	3.9

(注) インドの年間成長率は会計年度(4～3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	17/08	17/09	17/10	17/11	17/12	18/01	18/02	2016	2017
	(%)							(%)	
先進国									
米国	4.4	4.2	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.9	4.4
日本	2.8	2.8	2.8	2.7	2.7	2.4	2.5	3.1	2.8
ユーロ圏	9.0	8.9	8.8	8.7	8.6	8.6	8.5	10.0	9.1
英国	4.3	4.3	4.3	4.3	4.4	4.3	4.2	4.9	4.5
豪州	5.5	5.4	5.4	5.4	5.6	5.5	5.5	5.7	5.6
カナダ	6.2	6.2	6.2	5.9	5.8	5.9	5.8	7.0	6.3
エマージングアジア									
中国	4.0		0.0		3.9			4.0	3.9
香港	3.1	3.1	3.0	3.0	2.9	2.9	2.9	3.4	3.1
インドネシア								5.6	5.4
韓国	3.7	3.7	3.6	3.7	3.7	3.6	3.6	3.7	3.7
マレーシア	3.4	3.4	3.4	3.3	3.3	3.4	3.3	3.5	3.4
フィリピン								5.5	5.7
シンガポール	2.1		2		0			2.1	2.2
台湾	3.8	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.9	3.8
タイ	1.1	1.2	1.3	1.1	1.0	1.3	1.3	1.0	1.2

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	17/08	17/09	17/10	17/11	17/12	18/01	18/02	18/03	2016	2017
	(前年比%)								(前年比%)	
先進国										
米国	1.9	2.2	2.0	2.2	2.1	2.1	2.2	2.4	1.3	2.1
日本	0.7	0.7	0.2	0.6	1.0	1.4	1.5	1.1	-0.1	0.5
ユーロ圏	1.5	1.5	1.4	1.5	1.4	1.3	1.1	1.3	0.2	1.5
英国	2.9	3.0	3.0	3.1	3.0	3.0	2.7	2.5	0.7	2.7
豪州		1.8			1.9			1.9	1.3	1.9
カナダ	1.4	1.6	1.4	2.1	1.9	1.7	2.2	2.3	1.4	1.6
エマージングアジア										
中国	1.8	1.6	1.9	1.7	1.8	1.5	2.9	2.1	2.0	1.6
香港	1.9	1.4	1.5	1.6	1.7	1.7	3.1	2.6	2.4	1.5
インド	3.3	3.3	3.6	4.9	5.2	5.1	4.4	4.3	5.0	3.3
インドネシア	3.8	3.7	3.6	3.3	3.6	3.3	3.2	3.4	3.5	3.8
韓国	2.6	2.1	1.8	1.3	1.5	1.0	1.4	1.3	1.0	1.5
マレーシア	3.7	4.3	3.7	3.4	3.5	2.7	1.4	1.3	2.1	3.9
フィリピン	2.6	3.0	3.1	3.0	2.9	3.4	3.8	4.3	1.8	3.2
シンガポール	0.4	0.4	0.4	0.6	0.4	0.0	0.5	0.2	-0.5	0.6
台湾	1.0	0.5	-0.3	0.3	1.2	0.9	2.2	1.6	1.4	0.6
タイ	0.3	0.9	0.9	1.0	0.8	0.7	0.4	0.8	0.2	0.7

(注) 豪州は四半期データ。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2016Q2	2016Q3	2016Q4	2017Q1	2017Q2	2017Q3	2017Q4	2016	2017
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-2.4	-2.4	-2.4	-2.3	-2.4	-2.3	-2.4	-2.4	-2.4
日本	3.5	3.6	3.8	3.8	3.8	4.0	4.0	3.8	4.0
ユーロ圏	3.5	3.4	3.3	3.3	3.0	3.2	3.5	3.3	3.5
英国	-5.8	-6.4	-5.8	-5.3	-5.2	-4.6	-4.1	-5.8	-4.1
豪州	-3.9	-2.9	-1.1	-1.3	-2.2	-2.0	-3.1	-2.9	-2.3
カナダ	-3.6	-3.6	-3.2	-2.9	-2.8	-2.8	-3.0	-3.2	-3.0
エマージングアジア									
中国	2.4	2.4	1.8	1.5	1.3	1.0	1.3	1.8	1.3
香港	4.6	4.1	3.8	3.4	3.7	4.4	4.2	3.8	4.2
インド	-0.8	-0.5	-0.6	-0.7	-1.3	-1.4	-1.5	-0.6	-1.5
インドネシア	-2.2	-2.2	-1.8	-1.5	-1.4	-1.3	-1.7	-1.8	-1.7
韓国	8.0	7.4	7.0	6.3	5.5	5.6	5.1	7.0	5.1
マレーシア	1.9	1.9	2.1	2.0	2.6	3.0	3.0	2.1	3.0
フィリピン	1.1	1.0	0.2	-0.2	-0.3	-0.3	-0.8	0.2	-0.8
シンガポール	18.8	19.5	19.0	19.9	19.3	18.8	19.3	19.0	19.3
台湾	14.3	13.6	13.4	12.8	12.6	13.2	15.4	13.4	14.5
タイ	10.9	12.1	11.7	11.1	10.6	10.8	10.6	11.7	

(注) インドの年間経常収支は会計年度(4～3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準 (%)	日付	(単位: bp)	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	1.50- 1.75	引き締め: 2015/12/17	0.25 - 0.50	2018/3/21	+25	2018/3/21	+25bp
日本	無担保コール翌日物金利	0.10	緩和: 2008/10/30	0.50	2010/10/5	0-10	2018/4/27	現状維持
ユーロ圏	主要リファイナンスオペ金利	0.00	緩和: 2011/11/3	1.50	2016/3/10	-5	2018/4/26	現状維持
英国	バンク・レート	0.50	引き締め: 2017/11/2	0.25	2017/11/2	+25	2018/3/22	現状維持
豪州	キャッシュ・レート	1.50	緩和: 2011/11/1	4.75	2015/8/2	-25	2018/4/3	現状維持
カナダ	翌日物金利	1.25	引き締め: 2017/7/12	0.50	2018/1/17	+25	2018/4/18	現状維持
エマージングアジア								
中国	1年物貸出基準金利	4.35	緩和: 2012/6/8	6.31	2015/8/25	-25	2015/10/23	-25bp
インド	翌日物レポ金利	6.00	緩和: 2015/1/15	8.00	2017/8/2	-25	2018/4/5	現状維持
インドネシア	7日物リバースレポレート	4.25	緩和: 2015/2/17	7.75	2017/9/22	-25	2018/4/19	現状維持
韓国	7日物レポ金利	1.50	引き締め: 2017/11/30	1.25	2017/11/30	+25	2018/4/12	現状維持
マレーシア	翌日物金利	3.25	引き締め: 2018/1/23	3.00	2018/1/23	+25	2018/3/7	現状維持
フィリピン	翌日物金利	3.00	緩和: 2016/5/16	3.00	2016/5/16	-100	2018/3/22	現状維持
タイ	翌日物レポ金利	1.50	緩和: 2011/11/30	3.50	2015/3/11	-25	2018/3/28	現状維持
ベトナム	リファイナンス金利	6.25	緩和: 2012/3/12	15.00	2017/7/7	-25	2017/7/7	-25bp

(注) インドネシア中銀は2016年8月19日に政策金利をBレートから7日物リバースレポレートに変更

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行